怨霊ナショナリズム論（1）ファシズムより怖いもの

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

排他的ナショナリズムを代表する安倍内閣は首相も閣僚もみんなよくにている。安倍晋三と気が合うお友だちは、政治家だって学者だって経済人だって文化人だって、みんなそっくりだ。

在特会や日本版ネオナチとも昵懇なんだそうだ。いや違うと否定されても、仲が いいのはわかる。だって、よくにているから。

▽ともだちの輪

この仲間たちは驚くほど意見があう。

日本は侵略戦争なんかしていないという。日本は悪くないという。あれは自衛戦争だという。東京裁判も認めない。南京虐殺も従軍慰安婦もなかったことにする。

もちろん平和憲法は気に入らない。集团的自衛権には大賛成。軍事主義は大好き。原爆もほしい。何も理解していないくせに、秘密保護法には賛成。たとえどうなろうとも、原発再稼働には賛成。オリンピックは大歓迎。

中国や韓国は大嫌い。憎悪し蔑視する。アメリカから警告されても、国際社会から批判されても、べつに悪いとはおもっていない。

批判されれば、端から議論などしない。ただ罵倒して攻撃して沈黙させる。日本国と日本人の名誉を守るために奮迅して、かえって名誉を著しく傷つけてしまっても、平然としている。

また、人物がどれもこれも凡庸である。極端に低能なものもある。学者もいるし、評論家もいるし、偏差値が高かったエリート官僚もいるが、精神が凡庸であることにかわりはない。

そして、思想らしきものが見当たらない。なにか主張すると、甚だしく時代錯誤のアナクロだ。国際社会のことは知らないし、知ろうともしない。

▽凡庸さの正体

なにがこの人びとをこうさせるのか。残念ながら、ファシズムではない。それならまだよかった。

その正体は過激化した排他的ナショナリズムと、それが産み落とした「われわれ対やつら」という絶対的対立を前提とする精神性である。

同じものを求めるなら「われわれ」の仲間になる。だが、もし自分たちに反対するなら、与党だろうが保守だろうが右派だろうが、たとえ天皇だろうが、だれでも「やつら」であり、妥協の余地などない、話をする必要さえない、絶対的な敵となる。

思想や理念のかけらさえない人びとが信じるものは何か。

権力だ。見回しても、とりあえず国家権力ほど強大なものはないようだから、これに同調する。

何がしたいのか。

知性や教養を否定し侮蔑したい。平和憲法など陵辱したい、犯したい。近代の啓蒙思想が提唱し大戦後の国際社会が拠り所とする普遍的な価値はことごとく破壊してしまいたい。

自由も平等も博愛も、民主主義も平和主義も合理主義も、市民が獲得した人権も公民権も何もかも、すべて否定し破壊する。

人の世には、ファシズムよりも怖ろしいものがある。

怨霊ナショナリズム論（2）わたしたちの失敗

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

わたしたちは彼らを軽視した。あんな愚かものどもに何ができるか、おもうようにゆくものかと、あなどった。

わたしたちは憎悪した。安倍晋三を憎み、麻生太郎を憎み、菅義偉を憎み、石破茂を憎み、下村博文を憎み、高市早苗を憎み、山谷えり子を憎んだ。

しかし、いくら生身の人間を憎んでも、なにもかわりはしない。たとえ安倍内閣がたったいま総辞職したとしても、それだけでは日本社会が直面する問題は解決しない。

わたしたちは怒った。東電会長に怒り、社長に怒り、スポークスマンに怒り、御用学者に怒り、メディアに怒った。NHK経営委員となった作家や学者に怒り、NHK会長となった経済人に怒った。いくら怒ろうが怒るまいが、彼らはいずれ退場してゆく。だが、それだけでは問題は消えない。

わたしたちは分断された。脱原発を求める市民がいる。原発再稼働を阻止しようと戦う市民がいる。軍慰安婦問題を解決し、正義の実現を求める市民がいる。人権を守ろうと戦う市民がいる。

ジェンダー問題と取り組む市民がいる。夫婦別姓を求める人びとがいる。在特会を批判し、ヘイトクライムを阻止しようと戦う市民がいる。人種差別をなくそうと努力をかさねる市民がいる。特定秘密保護法の廃止あるいは改正を求めて活動する市民がいる。

民主主義を守ろうとする市民、憲法を守ろうとする市民、なかでも憲法第九条を守ろうとする市民がいる。そして安倍内閣を倒そうと戦う市民がいる。

わたしたちは個別の戦線で抵抗をつづけてきた。市民には生活も仕事もあるか

ら、すべての戦線には出られない。わたしたちは分断された。

だが、わたしたち市民がそれぞれの戦線で実はおなじ敵と戦っていたとすれば、どうか。わたしたちは連帯し、戦略を共有できる。

▽ 失敗の原因

わたしたちは彼らの「思想」など思想の名に値しないと見下し、その思想を特定できず、その思想の解析を怠った。だから、彼らの政治運動の目的が理解できないままである。

非論理的な思想、合理性などまったく必要としない思想は存在する。まぬけなわたしはその事実がいままで気づかなかった。

彼らの思想の名をいおう。反啓蒙主義である。では、反啓蒙主義とは何か。

怨霊ナショナリズム論（3）危機の正体

日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

日本社会が直面している危機の正体は反啓蒙主義にちがいない。

わたしたちの先達が、夥しい犠牲の果てに、惨たらしい圧政のもとに、理性のちからによって、ようやく獲得した理想や普遍的な価値がある。それらは万人に残された遺産だ。

人権・自由・平等・博愛・自主・自治・主権・合理主義・自由主義・民主主義などを、わたしたちは大切な遺産として引き継いでいる。憲法前文にもちゃんとそう書いてある。

反啓蒙主義はこれらの普遍的な価値を侮蔑し、否定し、破壊しようとする。

啓蒙主義と反啓蒙主義の闘争はすでに200年間もつづいている。反啓蒙主義は、いかなる国家においても、その文化の片隅にいつも存在する。

辺境にあるはずの反啓蒙主義が、大衆の支持を得て、社会の中央に進出してくるとき、反啓蒙主義は政治運動になる。

この政治運動は、20世紀の初頭に、ヨーロッパ社会において興隆した。反啓蒙主義にもとづく政治運動を阻止できなかったために引き起こされた惨禍が第二次世界大戦だった。

あのときの政治運動は一般にファシズムと呼ばれ、ナチズムとも呼ばれ、または全体主義と呼ばれ、あるいは軍国主義と呼ばれる。

呼び名がいろいろあるからわかりにくい。彼らに共通するのは反啓蒙主義である。

わたしたちは政治の体制や機構だけを見て、底流である思想を軽視していた。ファシズムもナチズムも、それぞれイタリアとドイツに固有の政治現象だと勘違いした。

▽ 怨霊の再来

昭和の大日本帝国もまたファシズムと呼ばれ、全体主義と呼ばれ、軍国主義と呼ばれている。

呼び名はいろいろある。しかし、大日本帝国による破壊と殺戮の思想的背景も、当時のイタリアやドイツと同じように、反啓蒙主義だったとするなら、あの侵略戦争に関するこれまでの理解はすべて見直されなければならない。

帝国日本の反啓蒙主義はイタリアのファシズムよりもドイツのナチズムに限りなく近い。ここで日本のそれをジャポニズムと呼んでもかまわないが、これはすでに美術用語とされた。

では、ヨーロッパ社会において啓蒙主義に対する反啓蒙主義の挑戦がはじまってから2世紀後に、帝国日本版の反啓蒙主義が国家滅亡によって頓挫してから60数年後に、日本社会に再来した反啓蒙主義をなんと呼ぶべきか。

わたしは、現代日本の反啓蒙主義には東アジアにひろく見られる死霊をめぐる信仰が影を落としていると考える。

よって、これを怨霊ナショナリズムと呼ぶ。

怨霊ナショナリズム論（4）国家とは何か

日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

安倍内閣が政治的に代表する「右傾化」と呼ばれる社会現象は反啓蒙主義にもとづく政治運動だと、わたしは考えている。

これを教えてくれたのはイスラエル社会だった。わたしはパレスチナを支援しているから、イスラエル社会を調べているうちに、日本社会はイスラエル社会にそっくりだという事実気づいた。

そして、ゼエブ・シュテルンヘル Zeev Sternhell という歴史政治学者に出逢った。シュテルンヘルはイスラエルの良識を代表する知の巨人である。まぬけなわたしはこの学者の名前すら知らなかった。

怨霊ナショナリズム論はシュテルンヘルのファシズムとナチズムに関する学説を現代の日本社会に応用したものです。シュテルンヘルの学説はいずれ紹介します。

▽ 国家の定義

反啓蒙主義の特質を知るには国家観からはじめるのがはやい。

みなさん、もし、試験問題のように「国家とは何か。簡潔に説明せよ」と問われたら、なんと答えますか。すこし考えないといけない。スラスラと答えられる人は少ないとおもう。

そこで、まあ、手軽ですから、ググって、ウィキってみましょう。

<国家（こっか）とは、国境線で区切られた領土に成立する政治組織で、地域に居住する人々に対して統治機構を備えるものである。>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/国家>

ウィキペディアでは、だれかがどこからかコピーしてきたものを、そのままサイトにペーストすることがおおい。コピペです。では、この定義のオリジナルはどこにあるのか。

歴史学者とは怖ろしいもので、すべてを調べつくす。スタンヘルが指摘するオリジナルは18世紀ヨーロッパの啓蒙主義です。理性の時代が建てた金字塔といわれる『百科全書』L'Encyclopédieの刊行がはじまったのは1751年。フランス革命がおわる半世紀も前のことでした。

この『百科全書』が「国家」the nationを、わずか23語で、定義しています。

“une quantité considérable de peuple, qui habite une certaine étendue de pays, renfermée dans de certaines limites, et qui obéit au même gouvernement.”

わたしはフランス語がまったくわからないので、正確には訳せませんが、だいたいこういうことが書いてある。

「特定の境界線に囲まれた特定の土地に住み、同じ統治権に従う相当数の人びと」

まずおどろくでしょう。わたしたちが「国家」と翻訳しているthe nationという概念は国民のことだった。そして、わたしがgouvernementを「政府」と訳さずに「統治権」としたのも、わたしたち日本国民がgouvernementという概念を、「政府」と訳すことによって、誤解してきたとおもうからです。これについては別のポストで述べます。

▽ 啓蒙主義が打ち消したもの

ウィキペディアにコピペされた「国家の定義」は18世紀の啓蒙主義が生んだものであり、現代の国際社会が継承している定義です。この簡素で無味乾燥のようにさえおもえる定義は18世紀の理性が全力で手にした啓蒙主義のかたまりでした。

それはこの定義に何が書かれていないかを考えればわかる。この定義から省かれ、否定されたものがある。民族・郷土・言語・宗教・文化・歴史です。

だから、この簡素な定義には、次のような理想が宣言されているにひとしい。

「髪の色も目の色も肌の色もことなり、生まれ育った土地もまちまちで、さまざま

なことばを話し、ことなる宗教を信じ、あるいは宗教は信じず、ことなる文化を持ち、それぞれの歴史を持つ人びとが同じ領土に暮らし、自分たちを自分たちのために自分たちで統治し、ともに生きる」

▽ 反啓蒙主義が信じるもの

理性が獲得した簡素な国家の定義に納得できない人びとがいる。「国家」とは国民のことだということがわからない人びとがいる。「政府」とは統治のことであり、国民が国民を国民のために統治することだということが理解できない人びとがいる。

なぜなら、彼らが信じる国家とは「純一民族」が「単一言語」を話し、そこに生まれ育ち、そこに死んでゆく「郷土」に暮らし、「同じ文化」と「同じ歴史」を伝えてゆく「日本人」を政府権力が統治するという共同幻想だからです。

ね、こういうふうを考えてゆくと、だんだん怨霊ナショナリズムの思想が見えてくるでしょ？

*

怨霊ナショナリズム論（5）ホロコーストへの道

日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

わたしたちは安倍晋三が政治的に代表する勢力を「右翼」と呼び、「極右」と呼び、あるいは「カルト」と呼ぶ。では、彼らにそれらのレッテルをはって、彼らについて何かわかるのか。

それがわたしの疑問です。

あるいは、宮台真司のように、安倍晋三をめぐる政治現象を「安倍ちゃん問題」と呼び、ヒトラーを欠いたアイヒマン問題、悪の凡庸の問題、役人や議員が上から言われた仕事をしただけの問題だと捉える。

そして、ヒトラーにはなり得ない安倍は「巨大な空洞」だとする。これはつまり、安倍はたまたま権力を手にした無知無教養なバカなんだと、あきれ果てている。しかし、そんな見方をして、なにか役に立つのか。では、巨大な空洞である安倍と集団アイヒマンとなった閣僚らが総辞職すれば、それで問題はなくなるのか。

それがわたしの批判だ。

いま安倍晋三が代表している政治勢力には、いかに無知でも、いかに浅薄でも、いかに非知性的に見えても、思想があり、その思想にもとづいて、彼らは政治運動を展開している。

怨霊ナショナリズム論は反啓蒙主義（反理性主義）こそがその思想だと見る。この

仮説によれば、彼らの思想の特性と、政治運動の方向性および目的が、他の切り口から論じるよりも、よりよく説明できるとおもう。

▽ 対立する二大潮流

歴史学者ゼエブ・シュテルンヘル Zeev Sternhell は18世紀に誕生した啓蒙主義と、それに対抗して同世紀の後期に出現した反啓蒙主義が近代思想の二大潮流だと論じている [1]。両者の抗争は200年以上もつづいていることになる。

この抗争はなぜはじまったのか。それを知るためには「国家」をめぐる根本的な問いかけをしなければならない。

社会および政治に関するわたしたちの行為の最終目的はなにか。個人と集団の関係にある本質とはなにか。なにが政治に正当性をあたえるのか。集団としての存在はなにを真の基盤としているのか。国家を成立させるものはなにか。

これらの問いかけにはさまざまな答えがある。しかし、その本質を見ると、多くの答えは二つの系統に分けられる。

ひとつは啓蒙主義の伝統から導かれる回答だ。すなわち、集団的存在とは生まれながらに権利を持つ理性的な個人の集まりだという。

もうひとつは、ある集団と他の集団を分かつものすべてに、すなわち、歴史や文化や言語や民族に訴えかけることによって得られた回答である。

▽ もうひとつの問いかけ

近代思想の二大潮流が抗争をつづけ、やがて一方が他方を圧倒するようになる。反啓蒙主義が啓蒙主義を葬り去った20世紀の中ごろ、ヨーロッパの政治文化に何が起きたか。

註1. Zeev Sternhell, "From Anti-Enlightenment to Fascism and Nazism: Reflections on the Road to Genocide."

http://www.massuah.org.il/upload/Downloads/PdtFile_673.pdf

怨霊ナショナリズム論（6）ゴーマニズムの限界

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

日本の「右傾化」と呼ばれる社会現象は右派による革命的な政治運動であり、そ

の運動の底流となっている思想は反啓蒙主義（反理性主義）だ。

これが怨霊ナショナリズム論の中心仮説です。反啓蒙主義は、18世紀の後期に、啓蒙主義が理想とした国家観に対抗する国家観として登場し、その潮流はいまもつづいている。

この反啓蒙主義の系譜を解説するには時間がかかります。ここで、まず仮説を現実にあてはめて実践してみましょう。この仮説によって、現実がよりよく説明できるかどうか。

▽ 小林よしのりの混乱

ゴーマニズムの小林よしのりは在特会と仲がいい山谷えり子（国家公安委員会委員長・拉致問題担当大臣・海洋政策領土問題担当大臣）が統一教会ともオトモダチだったことを知り、次のように書いています。

2014.09.29（月）

山谷えり子と在特会と統一協会

<http://yoshinori-kobayashi.com/5882/>

>山谷えり子は在特会だけではなくて、統一協会とも繋がりがあらしい。

>自称保守派や自民党議員に受けのいい「ジェンダー批判」や「純潔教育」は統一協会の影響だろう。

>在特会は「朝鮮人」に対して排撃的だが、なぜ統一協会の影響を受けた安倍政権を批判しないのだろうか？

>しかし、朝鮮人差別の「在特会」と、朝鮮人・文鮮明教祖の「統一協会」の二股をかけている山谷えり子とは、一体何者だ？

>女性の純潔や、専業主婦礼賛や、家族主義を掲げるものだから、神道関係者にも受けのいい山谷えり子、実に不気味な政治屋だ。

>この山谷を「国家公安委員長」に任命した安倍晋三は、一体何を考えているのか？

>まったく恐ろしい！

>日本はカルトに支配されつつあるのではないか？

>宗教団体に「個」はない。

>「集」で動くから、全員が統一した見解で動く。

>まさに統一協会だ。

>そういう各種宗教団体の集団票が欲しくて、政治家は媚びを売る。

>これが日本の政治を歪めていく。

>どこの組織にも属さない一般国民が、「個人」としての票で政治を動かすようにならなければ、国の将来は暗くなるばかりだ。

▽ 混乱の原因

小林よしのりは山谷えり子が在特会と統一教会を同時にオトモダチにしている理由

がわからない。だって、在特会は在日コリアンおよび韓国人を攻撃する「朝鮮人差別」団体であり、統一教会は「朝鮮人・文鮮明」を教祖とする韓国発祥の「カルト」だと、小林よしのりは理解しているからです。

だから混乱する。理屈にあわないから理解できない。たいていの人は小林よしのりと同じように混乱するとおもう。

理解できないので「二股をかけている山谷えり子とは、一体何者だ?」「実に不気味な政治家だ」という。そして、こんな山谷を「任命した安倍晋三は、一体何を考えているのか?」ということになる。

さらに、理解できないことに辻褄をあわせるために、山谷だけでなく安倍内閣も保守派も自民党議員も、みんな統一教会の影響を受けているとかんがえる。だから、金や票とひきかえに、統一教会が主張する「ジェンダー批判」や「純潔教育」や「専業主婦礼賛」や「家族主義」を支持しているんだと推測する。

すると、結論として「日本はカルトに支配されつつあるのではないか?」ということになります。

小林が混乱する原因は、ゴーマニズムの作者のような半端な勉強しかできない人物から見ても、安倍晋三と閣僚の面々は果てしなく愚かに見えるからです。ネトウヨと大差ない。知性もなければ教養もない。

だから、彼らに思想があるなんて絶体に気づかない。思想がわからないから、彼らがなにをしようとしているのかもわからない。思想の分析を怠ったことがわたしたちの失敗の原因です。

もちろん、わたしだって、安倍晋三をはじめとするオトモダチのグループは、大学教授とか文化人とか何だかんだとすべてひっくるめて、果てしなく愚かだとおもっている。

しかし、バカをバカにしないというのが怨霊ナショナリズム論の基本方針です。なぜなら、彼らはとてつもなく危険だからだ。

▽ 共通の思想、ひとつの運動

山谷えり子の思想は反啓蒙主義です。また在特会の思想も、人種差別攻撃であり、特定の人種を虐殺すると犯罪行為を扇動しているのですから、あきらかに反啓蒙主義です。仲がいいのはあたりまえだ。

そして統一教会は新宗教団体ですが、政治運動をしている。まず、共産主義を人類の敵として徹底的に批判する。社会主義もリベラリズムも激しく非難する。日本国憲法や境域基本法の改正を求めている。夫婦別姓やジェンダーフリーや人権擁護法には大反対。さらに、専守防衛や非核三原則や武器輸出三原則は破棄したいようだし、原子力発電所は大好き。統一教会は反啓蒙主義のかたまりです。

つまり安倍内閣と在特会と統一教会は、等しく反啓蒙主義にもとづき、それぞれの活動範囲において、革命的な政治運動を展開しています。

バカをバカにはしてはいけない。

怨霊ナショナリズム論（7）徹と誠の「国」

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

橋下徹（大阪市長）と桜井誠（在特会会長）が話し合いをした。

<https://www.youtube.com/watch?v=QQ6pvNhJu10>

現代日本社会の刻印としてネット上に記録された会見の動画を見て、わたしは腹を抱えて笑った。どうしようもなく下品なコンビがコントをはじめたとおもったからだ。

報道関係者が100人もつめかけていたのに、まったく能がない。ポコポコ灰皿や金ダライとはいわないが、せめて張扇くらい用意すべきだった。

と、このように、ほんの数秒間でも、考えてしまったのは、わたしが思慮の浅い不謹慎な人間だからである。人種差別団体に攻撃されている在日コリアンや人権活動家が見れば、怒りを覚えるだろうし、はつきりと危機を意識するだろう。恐怖を感じても不思議じゃない。

だから、同様の理由で、以下にあげる反応も思慮が足りないとおもう。

「喧嘩両成敗」

「どっちもどっち」

「言葉づかいがひどい」

「同じ穴のムジナの口喧嘩」

「うーむ。これはもう、演劇的で壮大なコントだ」

「貴重な人生、こんなアホに付き合っただけ無駄にしたいくない」

この点では、神奈川新聞はまともだ。

> 「『朝鮮人は半島に帰れ』は一つの意見」との桜井氏の弁が意見に聞こえるのは、深刻な差別として響いていないからだ。橋下氏の振る舞いが人気取りであったとしても、差別は許さないという姿勢に人気が集まるのなら、その方が健全な社会であることは言うまでもない。<

http://www.kanaloco.jp/article/79546/cms_id/108405

この良識をリベラリズムという。

▽ 徹と誠の思想

怨霊ナショナリズム論は彼らの思想に注目する。するとふたりは「同じ穴の貉」

だということがわかる。市長と会長はなかよく反啓蒙主義を信奉しているからだ。

桜井はわかりやすい。在日朝鮮人は出て行け、朝鮮へ帰れ、さもなければ虐殺するぞ、というのは人種差別攻撃であり、ジェノサイドという人道に反する犯罪を扇動する運動だ。これは啓蒙主義（理性主義）の理想に反する。

橋下も、すこし注意をはらえば、正体がわかる。橋下は建前を否定し、本音を愛する。ぶっちゃけた話しが大好きだというのは、建前なんか捨てて、本音で話そうということでしょう。

本音とは欲望と権力のことであり、建前とは理想や普遍的な価値を意味する。こういう人物は目的のためなら手段は選ばない。なんでもありだ。理想も普遍的な価値も侮蔑している。

橋下の思想が反啓蒙主義であることはあきらかです。

▽ おなじ「国」の住人

反啓蒙主義は、啓蒙主義の理想と対立する国家観を提唱する。実は、この反理性的な国家観のほうがふるい。

啓蒙主義は人と人を結びつける。人類を理性のちからによって連帯させようとする思想だ。人権は万人が生まれながらに等しくもつ権利であるべきだ。自由や平等は人類が共有すべき普遍的な価値である。

反啓蒙主義は人と人を分かち。人類を分断する原理に基づく思想である。人種・民族・言語・文化・伝統・歴史。彼らが奉じるこれらの原理は自らと他者を分別する。分断する。

在特会が在日コリアンを攻撃するのは、在日コリアンは、たとえ何世代もわたしたちとおなじ領土に暮らしていても、おなじ言語を話しても、「日本人」とは民族も文化も伝統も歴史も異なる「朝鮮人」であり、ともに生きることなどできない絶対的な他者だからだ。

そして、在日コリアンを人種差別攻撃することによって、普遍的な価値である人権や生存権を相対化することによって、公然と人権をレイプしている。在日コリアンだけの人権じゃない。わたしたちすべての、万人の人権が陵辱されている。

橋下徹市長は「会談」の翌21日、在日コリアンについて、「特別扱いすることは、かえって差別を生む」と記者団に答え、特別永住権制度は見直すべきだという意見を述べた。在特会とおなじ見解だ。

徹と誠はわたしたちとは異なる「国」の住人である。そして、自らの思想としての国家観によって、わたしたちが生きようとする理性的な国、理想としての国家を侵略しようとしている。

ふたりの会談は、いかに愚かに見えようとも、右派による革命的な政治運動の一環だ。両者はそれぞれに利益を得た。その運動をメディアが手助けした。

怨霊ナショナリズム論（8）さつきの「国」

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

2012年12月7日、片山さつき議員が次のようにツイートした。

>国民が権利は天から付与される、義務は果たさなくていいと思ってしまうような天賦人権論をとるのは止めよう、というのが私たちの基本的考え方です。国があなたに何をしてくれるか、ではなくて国を維持するには自分に何ができるか、を皆が考えるような前文にしました！<

https://twitter.com/katayama_s/status/276893074691604481

かくも無邪気に怖ろしいことをいう人びとがいる。

この文章には読み方があります。実は、片山議員がつかうキーワード、「国民」「権利」「義務」「天賦人権論」および「人権」「国」、はわたしたちが普通に信じているそれらの概念とはまったく意味がことなる。

それを説明するまえに、自民党の憲法改正草案に対する憲法学者たちの批判を聞いてみましょう。

岩波『世界』2013年7月号、「権力者の改憲論を警戒せよ」から引用します。

▽ 小林節（慶応大学教授）

>憲法の拘束から権力者たちが自由になろうとすることは、権力者たちが憲法を自ら管理しようとしていることを意味します。さらに言えば、自らの管理下にある憲法を国民に押し付けようとしていると言っている。その姿勢が自民党改憲案の全体ににじみ出ています。

>前提として無知と無教養があることは否めません。立憲主義の上で何をしてはいけないのかという境界線が見えていない。

>国民が権力者を縛るためのものだという憲法への観点が欠落しているため、たとえば「家族は、互いに助け合わなければならない」という条文が第24条に加えられています。道徳は法に盛り込まないという大原則を踏み外すもので、書いた人の法的素養を疑わせます。

>そもそも、国民を憲法で躰けようとする発想がおかしい。こういう世襲貴族の目線だから、国民を縛る道徳を憲法に盛り込んだうえで、「全て国民は、この憲法を尊重しなければならない」などと規定する（第102条）。これは憲法を知らない人が書いた改憲案だと言うしかない。<

▽ 水島朝穂（早稲田大学教授）

>最近の権力者は自己抑制しなければいけないという自覚にあまりに欠けていま

す。

>自己抑制の自覚以前の問題として、彼らが本当に何もわかっていない点こそ警戒しなければいけないでしょう。安倍首相がその典型です。

>彼らが憲法の意味を理解したうえで、意図的に専制政治やファシズムを作り出そうとしているのであれば、民主主義を壊す者として可視化することは容易です。

>権力者の自己抑制と言うことが概念としてだけでも認識されていれば、96条の先行改憲などは言い出すとしても多少は恥じらいを伴うはずののですが、安倍首相にはその認識が一切ありません。

>権力の意味を理解できていない権力者が堂々と自分への制約を取り払うために改憲しようとしているわけで、これは危機的状況です。<

▽ 思想としての国家観

小林と水島はりっぱな学者だとおもう。ふたりの批判はすべて正しい。しかし、怨霊ナショナリズム論から見ると、憲法学者たちの批判は的をはずしている。

ふたりに限らず、自民党憲法改正草案に対する批判は起草委員らの思想を軽視しているとおもう。彼らにはちゃんと思想がある。思想としての国家観だ。

水島はファシズムを指摘しているが、この学者がいうファシズムとは政治体制のことであって、思想としてのファシズムじゃない。

起草委員らの国家観に注目しないと、彼らの政治目的はわからないし、彼らがただただ果てしなく愚かに見えてしまう。

まあ、愚かにはちがいないですけどね。

でも「立憲主義」がわかっていないぞといっても、「書いた人の法的素養」をうたがっても、「これは憲法を知らない人が書いた改憲案だ」といっても、ただそれだけでは、日本社会が直面する危機の正体は見えてこない。

彼らの思想を知るには、改憲案の条文を読むのではなくて、彼らの解説を読むのがいい。たとえば、片山さつきのツイートがそうだ。

▽ キーワード

委員長をつとめた中谷元議員の「解説」を見よう。

>まず、現行憲法の前文については、全体が翻訳調であり、その原案が、アメリカの憲法やマッカーサーノートなど、占領時代に西洋の思想や歴史的文章から取り入れられたとみられる文章が並んでいます。自国の安全保障について、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」とは、まさに、ユートピア的発想による自衛権の放棄にほかなりません。現行憲法の前文を全面的に書き換え、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の3つの原則を継承しつつ、日本国の歴史や文化、国や郷土を自ら守る気概など国家の基本原理を簡素に、わかりやすく述べたものにするべきです。<

<http://www.nakatanigen.com/modules/archive/details.php?bid=566>

キーワードは「国」「郷土」「文化」「歴史」です。そして「西洋の思想」と「ユートピア的発想」とは、先進的なりベラリズムのことなんですよ。

次に、日本国憲法改正草案Q & Aを見ます。前文の内容について。

>第一段落では、我が国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であることを明らかにし、また、主権在民の下、三権分立に基づいて統治されることをうたいました。<

https://www.jimin.jp/policy/pamphlet/pdf/kenpou_qa.pdf

キーワードは「我が国」「長い歴史」「固有の文化」です。そして「国民統合の象徴である天皇を戴く国家」というのは、我々が日本国は啓蒙主義が理性のちからで定義した国家、思想としての国家、理想としての国家とはまったくちがうんだ、という意味です。

▽ 対立する思想潮流

ここでおさらいをします。

理性の時代が建てた金字塔といわれる『百科全書』L'Encyclopédie は「国家」the nation を次のように定義する。

“une quantité considérable de peuple, qui habite une certaine étendue de pays, renfermée dans de certaines limites, et qui obéit au même gouvernement.”

「特定の境界線に囲まれた特定の土地に住み、同じ統治権に従う相当数の人びと」

つまり国家 the nation とは国民のことです。この国民は天皇という象徴など必要としないし、郷土も民族も言語も文化も歴史も、なんにも関係ない。

この簡素な定義に書かれていないことこそが大事だったんですね。それは理性が排除したものだからです。この排除こそが理想だ。

では、この定義を、冗長になるけれど、わたしが書き直してみます。

「髪の色も目の色も肌の色もことなり、生まれ育った土地もまちまちで、さまざまなことばを話し、ことなる宗教を信じ、あるいは宗教は信じず、ことなる文化を持ち、それぞれの歴史を持つ人びとが同じ領土に暮らし、自分たちを自分たちのために自分たちで統治し、ともに生きる」

▽ 理性主義への挑戦

憲法改正を目論む彼らの思想は反啓蒙主義です。この思想としての国家観はまさに啓蒙思想（理性主義）が否定したものだ。

よって、自民党の議員らが起草したものは、憲法改正草案であると同時に、反啓蒙主義を称揚し、啓蒙主義が生んだリベラリズムへの挑戦を宣言する布告文であ

る。

これが、いま日本社会が直面する危機の正体です。

怨霊ナショナリズム論（9）美しい国、日本。

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

最初、わずか六文字に読点と句点が打ってある「標語」を目にしたとき、わたしはバカにした。「なにをおっしゃるうさぎさん」とくちずさんで、バカにした。

リベラルや知識人と呼ばれる人びともみな、心の底では、バカにしたとおもう。童謡はうたわなかったにしても、鼻で笑ったにちがいない。

ただただ空疎なキャッチフレーズだと見なした。当用漢字もろくに読み書きできないような人物に思想などあるわけがないと見下していた。

それがわたしたちの失敗のはじまりです。

世の中には、情緒的な非合理的な思想というものが存在する。反啓蒙主義（反理性主義）による思想としての国家観である。怨霊ナショナリストらが展開する革命的な政治運動はすべてこの国家観に導かれている。

バカをバカにしてはいけない。彼らはとてつもなく危険だ。

▽ 晋三のネーション

標語だけでは思想はわからないので、安倍晋三のベストセラー『美しい国へ』（2006年7月、文藝春秋）を読んでみましょう。

わたしは本というものが大好きだけど、よもやこのようにおぞましい本を手にすることになるとはおもわなかった。

まるで砧の森の木々がすべて枯れつくし、祖師谷大蔵駅交番前のウルトラマンが立ちながら朽ち果ててしまったような心地がする。

引用します。

>国家、すなわちネーションとは、ラテン語の「ナツィオ」が語源だ。中世のヨーロッパでは、あちこちからイタリアのボローニャにある大学に学生が集まってきた。大学の共通語はラテン語だが、同郷の仲間とつどうときは、自分たちの国の言葉で話した。そして酒を酌み交わしたり、歌を歌ったりしながら、故郷をなつかしんだ。どこで生まれ、どこで育ったのか、同じ民族でその出自を確認しあうのだ。その会合を「ナツィオ」とよんだのである。

>では、自分たちが生まれ育った郷土にたいするそうした素朴な愛着は、どこから生まれるのだろうか。すこし考えると、そうした感情とは、郷土が帰属している国の歴史や伝統、そして文化に接触しながらはぐくまれてきたことがわかる。

>とすれば、自分の帰属する場所とは、自らの国をおいてほかにはない。自らが帰属する国が紡いできた歴史や伝統、また文化に誇りをもちたいと思うのは、だれがなんといおうと、本来、ごく自然の感情なのである。

・・・中略

>はじめて出会う外国人に、「あなたはどちらから来ましたか」と聞かれて、「わたしは地球市民です」と答えて信用されるだろうか。「自由人です」と答えて、会話がはずむだろうか。

>かれらは、その人間の正体、つまり帰属する国を聞いているのであり、もっといえば、その人間の背負っている歴史と伝統と文化について尋ねているのである。

・・・中略

>ここでいう国とは統治機構としてのそれではない。悠久の歴史をもった日本という土地柄である。そこにはわたしたちの慣れ親しんだ自然があり、祖先があり、家族がいて、地域のコミュニティがある。その国を守るということは、自分の存在の基盤である家族を守ること、自分の存在の記録である地域の歴史を守ることにつながるのである。<

<https://www.s-abe.or.jp/analects/analects03/chapter3>

▽ くりかえされるキーワード

国家観を語るために、ネーションの語源からはじめています。中世イタリアのポローニャ大学で学ぶ若者たちの物語という切り口です。

もうこれだけで、晋三くんが書いたんじゃないって、わかりますよね。しかしだれが書いたかは問題じゃない。むしろ、次期首相候補（出版当時、安倍は内閣官房長官）に、この書をたくした勢力がいることに注目しなければならない。

なぜなら、安倍晋三著『美しい国へ』は怨霊ナショナリストらの思想書であり、彼らの革命宣言だからだ。

革命というものは何も左派の専売特許ではありません。彼ら新右派は本気で日本を変えようとしている。

引用文からキーワードをひろってみましょう。

国家・故郷・生まれ・育ち・民族・出自・郷土・素朴・愛着・感情・帰属・国・歴史・伝統・文化・誇り・ごく自然・正体

これ、どこかで見たことがありますよね。

▽ 国家とはいかにあるべきか

18世紀、啓蒙主義の金字塔といわれる『百科全書』L'Encyclopédieの作者たちは、理性のちからによって、つぎのように「国家」the nationを定義しました。

「特定の境界線に囲まれた特定の土地に住み、同じ統治権に従う相当数の人びと」と

この簡素な定義に書かれていないことがある。注意ぶかく、理性の全力をかけて、排除されたものがある。

作者たちが排除したものをあえて書き出すことによって、この簡素な定義の意図を示します。

「髪の色も目の色も肌の色もことなり、生まれ育った土地もまちまちで、さまざまなことばを話し、ことなる宗教を信じ、あるいは宗教は信じず、ことなる文化を持ち、それぞれの歴史を持つ人びとが同じ領土に暮らし、自分たちを自分たちのために自分たちで統治し、ともに生きる」

これこそが啓蒙主義が訴えた理想の「国家」です。

怨霊ナショナリストらが奉じる国家観はこの理想に対する挑戦だ。彼らはこの理想を破壊しようとしている。

▽ 理想とはなにか

18世紀の啓蒙主義が理想の「国家」を獲得したとき、当時その定義に見合う国家はなかった。そればかりか、いくら歴史を遡っても、そんな国家などなかった。

たとえば、古代ギリシャや古代ローマに、あるいは根本仏教の思索のなかに、理想の「国家」の萌芽が見られるかもしれない。しかし、理想を完全に実現した国家はなかった。

そして21世紀のいま、この理想に到達した国家はまだない。反啓蒙主義が生んだファシズムやナチズムが猛威を振るった第二次世界大戦のあと、その反省から、国際社会は理想の「国家」を成し遂げようと努力を重ねてきた。

それでもなお、いまだに、理想は完全には達成されていない。

まだ現実にはなし得ないもの、見果てぬ夢、遙かな峰、だからこそ、わたしたち万人の指標となるもの。それが理想です。

おい、怨霊ナショナリストども、わかんねえだろ。ちっとは勉強しろ。

怨霊ナショナリズム論 (10) 主権は国体と歴史にあり！

日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

2012年7月に放送された「朝まで生テレビ！」のテーマは憲法だった。ここで西田昌司議員の発言をめぐって、注目すべきやりとりがあった。

田原「決まってるじゃないか。主権在民だよ」

西田「だからそこが、はじめから、まちがってる」

田原「だったら主権は国民にないの？」

西田「主権があるのは、国体・歴史にあるんですよ。だからさつきから言ってい

るじゃない。われわれが主権があるのはこの歴史の延長線上にいるから、あるんだと・・・」

田原「ちょっと、ヘンなこと言い出したよ」

辻元「ちょっと西田さん、いいですか。主権在民は否定されるわけですか」

西田「主権在民というのはね、形の上では、法律上はそうだけど、その精神はなにかと言えば・・・」

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm18497032>

パネリストの辻元清美議員や東浩樹教授・小林節教授もリベラルだから、西田昌司議員や八木秀次教授の発言を聞いて、ほとんどあきれ果てている。田原総一郎みたいに人を叱りつける趣味はないし、最初から西田らをバカにしきっているのも、おもしろがっているようなところさえある。

リベラル陣営はこのとき、反啓蒙主義が生んだ思想としての国家観がなにをもたらすか、その危険性に気づいていない。

西田議員の「思想」を見てみましょう。

▽ 西田昌司の「人権論」

西田は国民主権を否定して「主権は国体と歴史にあり」と主張している。そして真っ先に天賦人権論を否定する。これについては、西山とともに自民党憲法改正推進本部起草委員を務めた片山さつきもおなじだ。

ふたりの憲法に関する発言はネットでも話題になった。だから西田はビデオを配信して弁明している。そのおかげで、彼らの国家観がよくわかる。

週刊西田一問一答「ネット騒動になった天賦人権論について」

2012年12月25日

https://www.youtube.com/watch?v=ptkX1sm0G_k&feature=youtu.be

引用します。2分42秒あたりから。

>つまり、日本人が日本の国で主権者だと、つまり、韓国人じゃなくて、日本人が日本の主権者。ね、アメリカ人じゃなくて、日本人が主権者。これ、あたりまえのようだけれど、ヘンじゃないですか。

>つまり、人間なんだから、おなじなんだから、日本人だろうが、韓国人だろうが、ね、アメリカ人だろうが、またもつと言えばですよ、北朝鮮の人であろうがですよ、ね、おなじ人間として、日本でも、外国人でも日本人とおなじだけの権利がとうぜん保証されてもいいんじゃないかと。

>ところが、日本人しか、その主権、つまり国政の、このようするに、法律を決めたり、国会議員を選んだりですね、そういう権限ですよ、それはないんですよ。なんで、ということを考えてください。

>そうすると、人権がですよ、ね、天から賦与されていると、ね、広く、人権はね、生まれながらにしてですね、人の権利は、この人権というのは、この侵しがたい絶対的なものだという論法からするとですよ、主権が日本人あるというのが説明できないんですよ。日本人だから、あるわけですからね。だから、それは人権といながら、人の権利じゃない。国民の権利なんです。

>で、国民の権利とはなにかというと、国民というのが他の人とちがうのはなにかというと、日本人が国籍をもっている意味はなんなのかということですね、たしかに、国籍法で国籍をもっているということになるんですが、ま、いちばんその原則はどこまで行っても、日本人のこどもというのが日本国籍をもつことのいちばんの意味なんですよ。

>じゃあ、なんで日本人のこどもが主権があるのかということ、日本人のこどもということ、われわれ先代の日本人、そのまた先代の日本人をはじめですね、われわれの先人がこの国をつくって、築いて、守ってですね、これを伝えてきた。その努力と義務をはたしてきた正当な後継者、相続人なんですよ。

>だから、親の権利が、義務が、われわれにも相続されて、権利として主権がある。義務としてさまざまなものがまたある。こういうことですよ。だから相続権なんです。日本人としての相続権をわれわれは主権と呼んでいるわけなんですね。

>で、そうかんがえると、それぞれの国、地域によって、とうぜん、北朝鮮なら北朝鮮、アメリカならアメリカの、その相続人としての権利があるわけです。それがそれぞれの国の国民の主権なんです。

>だから、人民の、天から与えられたということじゃなくて、人民主権というね、そういうかんがえかたじゃなくて、その国その国の歴史にもとづいた権利がですね、その国の主権者の理由でしょ。そういうことなんです。

>だから、国民主権と。国民主権でいいんですけど、その意味はなにかとかんがえてみると、わたしが偉いんじゃないんですよ。国民が偉いんじゃないくて、そのわれわれの先人の相続人としての権利だと、もうすこし、一步、謙虚な姿勢で、われわれの権利行使をかんがえないといけない。

>当然ながら、権利行使の上には義務があるわけですよ。この国を守ってゆくという、またこの国の伝統を伝えてゆくという義務がある。その義務とセットになっている権利なんですよ。

>そのことがわかっていない人が多すぎるんですよ。だから、国民主権といった瞬間、日本人はね、国民がいちばん上なんだとおもっちゃうんです。国民がいちばん上じゃないんだと。国民の上に先人がいるんですよ。先人の権利をわれわれは継承していると。そういう意味で国民主権というのはおかしいんですよ、そういういかたをしているわけですよ。

>だから、これはもうだれでも、かんがえてもらえればわかるはずなんですよ。ところが、そのことをわからずに、国民主権といえはですね、まあ、日本国憲法のな

かでね、保証されている。基本的人権もふくめてですよ。まあ、ほんとうにこれは、そのところに疑問の余地をはさむということも、おかしいと言うこともできないと思ひ込んでるんですね。

>だから、これをわたしは称して「おバカさんですね」といつちやうわけですね。つまり、よくかんがえてみましようねと。<

▽ 西田昌司の「国」

リベラルが西田の「人権論」を聞いたら、どうおもうか。まず、基本的人権と国民としての主権を混同していると指摘するだろう。そして、こんなこともわからないのか、憲法のなんたるかをまったく理解していない、とあきれるとおもう。

このように見下してしまうから、西田の思想が理解できないし、その危険性にも気づかない。

西田がしているのは人権と主権の混同ではなくて、人権の相対化です。彼らが好んでつかう「天賦人権論」とは、明治初期に起こった自由民権運動（リベラリズム）が主張しました。

だから、天賦人権論とは、18世紀の啓蒙主義が確立した自然権、万人は生まれながらにしてさまざまな権利を持つという思想が日本に伝えられたときの呼び名だと見なしてもいいでしょう。

人権とは普遍的なものです。肌や目や髪の色に関係なく、どこの土地に生まれたかは関係なく、どんな文化や歴史や宗教を継承しているかは関係なく、だれにも等しく、万人に生まれながらに備わっている権利のことです。これは理想であり、わたしたちの理性が獲得した普遍的な価値です。

しかし西田はこれを相対化し、限定する。北朝鮮には北朝鮮の、アメリカにはアメリカの、そして日本には日本の、それぞれの文化や伝統や歴史にふさわしいそれぞれの人権があるという。

このように、普遍的な人権を相対化してしまえば、もう国民としての権利である主権と区別する必要なんかない。

西田は、わたしたち日本人の権利は、日本の文化や伝統や歴史を継承する子孫として、祖先から相続したものだという。だから、正当な相続人となるためには、祖先がそうしたように、国をつくり、国を築き、国を守らなければならない。この義務を果たさないのであれば、正当な相続人とは認められず、権利も相続できない。

西田の思想としての国家観には原理がふたつある。土と血です。

土とは、「日本人」を生み育てた郷土としての「国」のこと。やがて死ねばそこに帰る「土」です。

血とは、「日本人」としての血統のこと。親から子へ、代々継承されてゆく文化や伝統や歴史としての「血」です。

もし西田のいう「国」がほんとうの日本なら、わたしはそんな日本には住んでい

ません。もし西田のいう「日本人」がほんとうの日本人なら、わたしは日本人じゃない。相続人にはなり得ないから、わたしには何の権利もないことになる。

西田らがいう「文化」や「伝統」や「歴史」はすべて幻想です。わたしはそんな幻想を彼らと共有するつもりはない。

▽ 西田くんへの忠告

西田にみられるように、反啓蒙主義がもたらす反理性的な思想としての国家観が日本社会のなかで支配的となり、大衆の支持を得て、啓蒙主義を継承するリベラリズムを駆逐するとき、なにが起こるか。それは次回に述べます。

とりあえず、ここで西田くんにとひとつ忠告がある。

君は「これはもうだれでも、かんがえてもらえればわかるはず」だという。わたしにはまったく理解できない。これがわからない者のことを君は「おバカさんですね」という。

いかにも、わたしは大馬鹿者である。西田くん、バカをバカにしちゃいけない。

わたしには仲間がたくさんいる。国境を越えて、時代を超えて、仲間がいる。まだ生まれていない、これから生まれてくる仲間がいる。わたしたちには普遍的な価値がある。理想がある。君らに負けるものか。

怨霊ナショナリズム論（番外編）小学生のための「主権在民」

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

60年代のおわりに、小学5年生の社会科公民の授業で、担任の清水先生が「この国を治める最高の権力はだれがもっているのか」と6組42人の生徒にたずねた。

こたえがわかっている生徒は手を上げる。よくわかっていない生徒も、みんなが手をあげるから手をあげる。41本の手があがった。

わたしはひとりあげなかった。「主権在民」も「国民主権」もなにかへんだなとおもっていたからだ。「おや、安濃はわからないのか」と清水先生がいう。うつむいて「わかりません」とこたえた。

クラス全員に笑われましたね。しかも、いちばん笑っていたのは清水先生だよ。手をたたいて喜ぶことはないじゃないか。

いまなら論戦をはってやる。ゴータマ・ブッダが得意としていたカウンター攻撃だ。

かくして、11歳のわたくしは嘲笑の海のなかに悠然と立ち、静かに、そしてちからづよく。こう訴えた。

「友よ、ならば問おう。国家とは何か。民主主義とは何か。国民主権とは、いったい何なのか」

*

怨霊ナショナリズム論 (11) ジェノサイドの定義

日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について
安倍内閣が政治的に代表する新右派の運動には思想がある。思想としての国家観だ。彼らの反理性的な国家観は何をもたらすだろうか。
ここでジェノサイド条約が鍵になる。

▽ 集団殺害罪の防止及び処罰に関する条約

第一条

締約国は、集団殺害が平時に行われるか戦時に行われるかを問わず、国際法上の犯罪であることを確認し、これを防止し処罰することを約束する。

第二条

この条約では、集団殺害とは、国民的、人種的、民族的又は宗教的集団を全部又は一部破壊する意図をもつて行われた次の行為のいずれをも意味する。

(a) 集団構成員を殺すこと。

以下略

<http://www1.umn.edu/humanrts/japanese/Jx1cppeg.htm>

▽ ロスト・イン・トランスレーション

1951年1月12日に発効した本条約は「ジェノサイド条約」という通称でよく知られている。

なにか訳語をあたえてしまったために、本来の意味が失われることはよくある。ここでは第二条の訳文に不備があるために、ジェノサイドの定義がわかりにくくなっている。

こころみに、わたしが英文から訳します。

Article 2

In the present Convention, genocide means any of the following acts committed with intent to destroy, in whole or in part, a national, ethnical, racial or religious group, as such:

(a) Killing members of the group;

<http://www.hrweb.org/legal/genocide.html>

第二条

この条約においてジェノサイドとは、国籍や民族・人種・宗教などによって特定される集団の全部または一部を破壊することを意図して行われた次の行為のいずれをも意味する。

(a) 集団を構成する人びとを殺すこと。

▽ その意味をひろえ

まず、わたしの訳文では「～的」という便利で曖昧な語は使わなかった。つぎに nationality は、「国民的」などとはいわずに、「国籍」と明確に訳した。そして、原文にはない「～によって特定される」という語句を、原文から意味をひろって、補っている。

条約などの法文や契約書を訳すときには、まさに一言一句、忠実に言語構造の異なる日本語に対応させようとする。だからこそ、意味が失われる。

わたしのようにならば、ジェノサイドの意味はよくわかる。人を国籍や民族・人種・宗教などによって分かち、区別し、差別し、分離し、迫害するならば、最後にはジェノサイドが起こり得る。

▽ 国家観とジェノサイド

ここで再び、18世紀啓蒙主義の金字塔といわれる『百科全書』L'Encyclopédieの作者たちが「国家」the nation をどのように定義していたかを見よう。

「特定の境界線に囲まれた特定の土地に住み、同じ統治権に従う相当数の人びと」と

この簡素な定義に書かれていないことがある。注意ぶかく、理性の全力をつくして、排除されたものがある。

それは人種・民族・郷土・文化・歴史・伝統・宗教だ。

作者たちが排除したものをあえて書き出すことによって、再び、この簡素な定義の意図を示そう。

「髪の色も目の色も肌の色もことなり、生まれ育った土地もまちまちで、さまざまなことばを話し、ことなる宗教を信じ、あるいは宗教は信じず、ことなる文化を持ち、それぞれの歴史を持つ人びとが同じ領土に暮らし、自分たちを自分たちのために自分たちで統治し、ともに生きる」

国籍や人種・民族・郷土・文化・歴史・伝統・宗教によって、人と人を分かるとき、分断するとき、区別し差別するとき、排除し隔離するとき、自分たちとは違うからという理由で弾圧するとき、最後の最後に何が起きるのか。

『百科全書』の作者たちはその危険性にはっきりと気づいていた。啓蒙主義が否定されるとき、理性がかなぐり捨てられるとき、リベラリズムが社会から完全に葬られたとき、ジェノサイドが始まる。

ナチ党のならず者どもが権力を掌握したからジェノサイドが起こったんじゃない。社会からリベラリズムが駆逐されてゆくとき、人権もひとつひとつ消えてゆく。民主主義はかならず腐敗する。

ファシズムが興隆し、やがてファシズムよりもさらに怖ろしいものが登場する。人類が獲得した普遍的な一切の価値に対する破壊攻撃がはじまる。

だから、ジェノサイドはどんな国にでも、いかなる時代にも起こり得る。

▽ 怨霊ナショナリストらの国家観

彼らの思想としての国家観を、再び、見てみましょう。

安倍晋三『美しい国へ』より。

>ここでいう国とは統治機構としてのそれではない。悠久の歴史をもった日本という土地柄である。そこにはわたしたちの慣れ親しんだ自然があり、祖先があり、家族がいて、地域のコミュニティがある。その国を守るということは、自分の存在の基盤である家族を守ること、自分の存在の記録である地域の歴史を守ることにつながるのである。<

<https://www.s-abe.or.jp/analects/analects03/chapter3>

西田昌司議員の週刊西田一問一答「ネット騒動になった天賦人権論について」は、原稿なしで話しているから、まとまりがない。わたしが要約します。

要約>日本国はわたしたちの祖先が代々つくり、築き、守ってきた。わたしたちはその後継者として、国を守り、この国の伝統を伝えてゆく義務がある。その義務を果たす限りにおいて、国民としての権利が与えられる。<

https://www.youtube.com/watch?v=ptkX1sm0G_k&feature=youtu.be

怨霊ナショナリストに共通するキーワードは人種・民族・郷土・文化・歴史・伝統・宗教です。すべては啓蒙主義が、国家の原理としてはいけないんだと、排除したものだ。

ね、いったでしょ。バカをバカにしたらいけないって。

彼らはとてつもなく危険だ。彼らとの戦いに負けるわけにはいかない。絶体に負けれない。

怨霊ナショナリズム論 (12) 怨霊どもの憲法ぎらい

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

まず、いいニュースから。

いますぐにジェノサイドが起こるわけじゃない。

つぎに、わるいニュースを。

思想としての国家観を持つ怨霊ナショナリストらは彼らがりベラリズムだと見なすあらゆるものを破壊します。この革命的な政治運動はもうはじまっている。

どんなに愚かに見えても、彼らには思想がある。この思想に基づいて運動を展開しているのだから、目的もちゃんとある。これを軽視してはいけない。彼らは行き当たりばったりなんかじゃないんだ。

▽ 彼らはそれが許せない

彼らは日本国憲法が許せない。その理由は彼らの口からいろいろと出てくる。たとえば、

- 占領軍に押しつけられた憲法だ
- 自分の国を自分で守れない情けない憲法だ
- GHGの文官らがわずか1週間で書き上げた憲法だ

難癖はまだまだつづく。しかし、彼らが実際に何を言っているかはさほど関係ない。反理性的な国家観を奉じる怨霊ナショナリストらが日本国憲法をきらう理由はもっと簡単に説明できます。

憲法がりベラリズムの理想に基づいて書かれているからです。とくに前文と第九条は最先端りベラリズムの塊だ。だから彼らは憲法が許せない。

▽ 一步後退したのはどっちだ

彼らは平和憲法がたたえるりベラリズムを破壊しようとしている。破壊するには改憲して、すべて新しく書き直してしまうのがいい。

そのために安倍内閣は、まず集団的自衛権の容認を打ち出し、第9条を壊しにきた。そして改憲のハードルを低くするために、第96条の修正を訴えた。

しかし良識ある市民からの抵抗がつよく、96条の書き換えさえまならないと判断した安倍内閣は改憲政策を迂回し、閣議決定によって、集団的自衛権を容認した。

リベラル陣営はこの姑息な手段に怒りを覚えたが、とにかく改憲は阻止したのだし、安倍内閣の改憲政策を押し返したと感じた。

もし、こんなふうに事態を解釈しているしたら、あまい。

憲法を破壊するにはいろんな方法があります。なにも書き換える必要はない。彼らが破壊したいのは憲法のりベラリズムだ。りベラリズムは思想です。わたしたちは憲法の条文をまもっているのじゃなくて、この思想と精神をまもっている。

だったら、憲法を破壊するためには、りベラリズムがとなえる普遍的な価値を踏みじって、陵辱して、レイプして、権威も価値も何もかも汚してしまえばいい。

安倍内閣は閣議決定によって、憲法をレイプしました。たとえ次期政権が安倍内閣の閣議決定を覆し、集団的自衛権を否認したとしても、ひとたび汚れた理想は永遠に汚れたまま。怨霊ナショナリストらにとって、これは勝利です。

一歩後退したのはわたしたちだ。

怨霊ナショナリズム論（番外編）狼と呼ばれる男

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

歴史学者ゼエブ・シュテルンヘールの著作がとどいた。フランス語がわからないので、すべて英訳本をもとめた。邦訳はまだない。

発注してから三冊がそろそろまで、4週間ちかくかかったことになる。左から、

Neither Right nor Left: Fascist Ideology in France

右でも左でもなく：フランスにおけるファシスト思想（1983、英1986）

The Birth of Fascist Ideology

ファシスト思想の誕生（1989、英1994）

The Anti-Enlightenment Tradition

反啓蒙主義の伝統（2006、英2010）

先日、小田急線の中つり広告に「知の巨人、立花隆」と書いてあった。もしあのジャーナリストが「知の巨人」なら、わたしだって身長2メートルくらいにはなれそう。

週刊誌の編集デスクは知らない。世の中にはほんとうに知の巨人と呼ばれるにふさわしい人びとがいて、学問の常識を覆してきた。エドワード・サイードがそう。そしてシュテルンヘールもそのひとりである。

この三冊を読み切れば、反啓蒙主義（反理性主義）から日本社会を救う手立てがきつと見つかる。

読み切るためには、この他に何十何百という書籍や論文を読まなければならない。きつと、そういうことになる。しかし、反啓蒙主義の怨霊どもとの戦いは長くつづく。これから30年の戦いになる。時間はある。

この戦いに負けるわけにはいかない。そして最後に勝利するのはわたしたちだ。それは歴史が教えてくれる。

わたしたちには仲間がたくさんいる。理性のちからを信じ、理想や普遍的な価値を信じる者たちはみなわたしたちの仲間だ。いまもそれぞれがそれぞれの前線で戦いをくりひろげている。

わたしたちは分断されているかもしれない。だがいずれ連帯し、ともに戦う。前線はいくつあるにしても、敵はおなじだからだ。

まだ生まれていない子どもたちもわたしたちの味方だ。彼らが生まれて、若者に成長するとき、そして反啓蒙主義を文化の片隅へ追いやる時、日本はよりよい社会を迎える。未来の若者たちにバトンを渡そう。

この三冊の書物がわたしの前線です。戦いはここにはじまる。怨霊ども、待っている。シュテルンヘルがわたしの味方だ。

この人の名はゼエブ。ヘブライ語で狼を意味する。

怨霊ナショナリズム論 (13) ファシスト思想との戦い

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

またニュースからはじめようか。まずいいニュースから。

12月の総選挙の結果、自公連立政権は議席数をへらすだろう。

つぎに、わるいニュースを。

たとえ安倍内閣が総辞職しても、たとえ安倍晋三の政治生命がおわっても、たとえ野党連合が政権を奪ったとしても、過激右派がすすめる革命的な政治運動はとまらない。ファシスト思想はこのまま日本社会に居座る。

怨霊ナショナリズム論は現代日本社会におけるファシスト思想の研究です。では、このファシスト思想はいつはじまったのか。どこで生まれて、どこにいたんだ。

おそらく、あの司馬遼太郎が愛する幕末から日露戦争までに、日本のファシスト思想は生まれているとおもう。この時代の思想をよくしらべてみたい。

坂本龍馬にはリベラリズムがある。西郷はどうか。大久保はどうか。伊藤はどうだったか。反啓蒙主義（反理性主義）が見つかるかもしれない。

明治にはファシスト思想とリベラリズムの対立がはじまっている。大正にはリベラリズムが優勢になったこともあった。

しかし昭和の1930年代までには、ファシスト思想がリベラリズムを圧倒する。反理性が理性を社会から駆逐する。そして帝国日本は無謀な戦争へと暴走をはじめた。

広大なアジアで二千万ものいのちを奪い、国家を滅亡させても、ファシスト思想はなくならなかった。これはヨーロッパでもおなじだ。

ファシスト思想は第一次世界大戦の塹壕から生まれたわけじゃない。ファシスト思想はベルリンの総統地下壕でヒトラーとともに死んだわけでもない。啓蒙主義と

反啓蒙主義の戦いはすでに二世紀半もつづいている。

日本のファシスト思想は敗戦後に社会や文化の片隅へ追いやられた。それがいま社会や文化の中央に堂々とあらわれて、跋扈している。怨霊ナショナリストが革命的な政治運動をはじめ、彼らがりベラリズムとみなすあらゆるものを攻撃している。

ファシスト思想はその国家観に根ざしています。この思想としての国家観から、彼らの活動のすべてが導かれる。

啓蒙主義・理性主義・リベラリズムは人と人が、国境も宗教も人種も民族も文化も伝統も歴史もすべて超えて、手を結ぶことができるという理想をあたえてくれる。

反啓蒙主義・反理性主義・ファシスト思想は人と人を分断する。国境で分断し、宗教で分断し、人種で分断し、民族で分断し、文化・伝統・歴史によって分断する。みずからと異なる人びとを絶対的な他者として、区別し、差別し、弾圧し、いづれ殺害する。

理性を放棄するものは悪だ。不条理にあこがれるものは悪だ。人類の連帯という理想を破壊しようとするものは悪だ。

わたしたち人類は最善をつくすこともある。しかし最悪をつくすことだってある。いかなる社会も、いかなる国も、いかなる時代の人びとも、不合理と暴力と破壊の誘惑からのがれられない。わたしたちはとてつもなく危険なんだ。

いま日本のリベラリズムは過激右派によって社会の片隅へ押しやられようとしている。

この戦い、負けるわけにはいかない。

狼ゼエブ・シュテルンヘールの助けを得て、これからはものごとをひとつひとつ明確にしてゆく。

怨霊ナショナリズム（番外編）御用づくし

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

御用新聞・御用テレビ・御用学者・御用アナリストなど、いろいろと「御用」はいますよね。御用ばやりの昨今だ。

これはね、あんまり正確な表現じゃない。鬱憤ばらしにはなるけど、効き目はない。だれかや何かを「御用」と呼んで、それでなにか解決するわけじゃない。

なぜなら、その御用ナントカは、自分自身が「御用」だとはおもっていないからです。善意で働いている人がおおい。一所懸命に真剣に社会のために尽くしている

のかもしれない。

彼らは「これは金儲けだ」とはおもっていない。これは地位を得るためだとはかんがえていない。自分が生き残るためには、立身出世するためには、いざ汚れてみせるようぞと覚悟しているわけじゃない。悪人が、これは悪だと知りながら、あえて悪をおこなっているわけじゃない。

ほんとうに自分の言っていること、やっていることが正しいのだと信じている。自分こそ専門家であり、自分こそ憂国の士だとおもっている。

そういうものなんです。では「御用」とはなにか。

じゃあ、いいですけどね、「御用」とは、わたしたち自身を映し出す鏡です。たとえば、もしメディアが「御用」なら、それはわたしたちが「御用」だからです。メディアは社会の病理を暴く機関じゃない。メディア自身が社会の病理なんだ。

学者が「御用」なのも、経済アナリストが「御用」なのも、ナントカ評論家が「御用」なのも、わたしたちの社会が「御用」だから、わたしたち自身が「御用」だからだ。

怨霊ナショナリズム論（番外編）ドコデモ異邦人

新宿伊勢丹の五階には陶器のコーナーがある。妻とわたしは焼き物が好きなので、買い物にでかけたときには、かならず見わたすことにしている。この器にどんな料理をのせようか、とかんがえるだけでたのしい。

日曜日には、奥の一角に美濃古染附の器がならんでいた。巨体をそびやかす黒服のガードマンがいる。そんなに値がはるのか。

展示品をぐるりと見から、妻にきいた。「ぜんぶ見た？　じゃあね、高いとか安いとかじゃなくて、どの器がすてきだとおもった？　えらんでごらん」

もちろん、日本語でこう言ったんですよ。妻は香港出身で英語を母国語としているけど、かんたんな話しは日本語でするようにしている。妻の練習になるから。

すると、わたしの質問を耳にしたガードマンがよってきて、まず妻に「いかかですか。これはお気に召しましたか」とたずねた。ガードマンじゃないんだ。

その人はわたしのほうへ向きなおると朗々と解説をはじめた。

「マイネームイズ、ア、オ、ヤ、マ。アイアムクラフツマン。マイグランドファーザーズワークスアーオーバーゼアー。マイファーザーズワークスアーゼアー。アンドマイワークスアーヒアー」

なんと英語だ。発音はすごいけど、わたしは日本人だからすべてわかる。この巨人は寛元の三代目なんだ。英語をたくみにつかうので、わたしはこの三代目を武蔵丸と命名した。

武蔵丸の解説はつづく。最初から最後まで英語で、わたしに美濃古染附の伝統についておしえてくれた。完全にわたしのことを外人だとおもいこんでいるので、こっちとしても、いまさら自分は日本人だと名乗り出るわけにいかない。

武蔵丸の英語講義がおわったとき、わたしははずかにかこう言った。もちろん日本語で。「この茶碗、きれいですよね。ほら、絵柄を描く筆の跡が味になっている。これください」

すると武蔵丸は巨大なほほえみを浮かべて「ありがとうございます。日本語がお上手ですね」とほめてくれました。

▽ 異邦人とはなにか

わたしはアメリカとカナダで20年ちかく暮らしたことがある。そのとき、わたしは、もちろん「異邦人」。そして、この祖国でもわたしは、なんと「異邦人」。だから世界中どこへ行っても「異邦人」なんだ。

外人だとおもわれたことはこれまで何度もある。べつに平井堅みたいな顔立ちをしているわけじゃないのに、なぜか外人にまちがわれる。

たとえば、空港や銀行やホテルで日本人のスタッフに、わたしが日本語で話しかけているのに、こたえが英語でかえってくる。

トロント大学の東洋図書館で日本経済新聞の囲碁欄を読んでいるときに、日本人留学生に、外人だとおもわれたこともある。わたしのことをチラチラ見ているので、これは来るなとおもったら、

「あのう、日本語をお読みになるんですか」

「はい、読みます」

「日本語は難しくないですか」

「むつかしいですね。これは一生勉強するしかない」

「英語と日本語では、どちらが楽に読めますか」

「そりゃ、日本語のほうが速く正確に読めますよ」

と、ここまで言っても、まだわからない。きょとんとしている。

はじめて会った日本の婦人と30分くらいずっと話をした挙げ句に、もう感に堪えないという表情で「ほんとうに日本語がお上手ですね」とほめられたこともある。

新宿高島屋地下食料品売場にあったおにぎり屋さんのおばちゃんに、まちがわれたこともあった。妻といっしょに小さなカウンターにすわって、注文したおにぎりを待っていると、先に味噌汁を運んできたおばちゃんが妻にむかって「熱いですから気をつけてくださいね」といい、わたしにむかって「ベリーホット。OK?」と忠告してくれました。

念のためにもう一度いいますが、わたしが外人にまちがわれるたびに笑い転げる妻が外人で、わたしが日本生まれの日本人なんです。しかし妻は完全に日本に同

化している。わたしはいまだに同化できない。この果てしない道。そしてこの心地よさ。

丸山真男はいつか雑誌のインタビューにこたえて、自分は羽田国際空港から飛行機に乗って飛び立つ瞬間がいちばん嬉しいと語った。日本という束縛から解放されて「異邦人」になれるからです。

ここで「異邦人」というのはどこかよその国から来た人という意味ではありません。国籍や人種・民族・文化・伝統・宗教・歴史から解き放たれた人、すなわちリベラリズムを体現した人のことです。

わたしは飛行機に乗る必要もない。いつだって、どこだって「異邦人」になれる。この自由。怨霊ナショナリストどもには、まあ、わかんねえだろうな。

怨霊ナショナリズム論 (15) ファシストの善意

▽日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

ファシストは善意の人です。と、いっても信じてもらえないでしょうね。わたしも気づいたときにはおどろいた。でもほんとうだからしかたない。

いま日本ではファシスト思想を奉じるものらが政治運動を展開している。わたしは彼らをファシストと呼ぶ。その彼らには善意がある。いかに愚かでも善意なんです。

彼らはこのままでは日本社会がこわれてしまう、日本の文化は滅びる、日本は文明の危機に瀕していると本気でかんがえています。その崩壊や墮落や破滅から日本を救うつもりです。

なぜ日本が滅びつつあるのか。彼らはリベラリズムおよび個人主義が日本を破壊すると信じている。だから、彼らがリベラリズムと見なすありとあらゆるものを攻撃する。彼らにとって、これは聖戦です。

彼らは絶対的な正義は自らにあると信じて疑わない。彼らこそが正義であり善なんだ。リベラリズムの理想を信じるわたしたちが悪となる。

▽ ファシストはだれ

彼らは自分のことをファシストとは呼ばないですよ。右翼とも呼ばないし、軍国主義者・絶体主義者・国家主義者だとも自認していない。まあ、憂国の士と呼んでもらいたいのでしょうけどね。

安倍晋三はアメリカのハドソン研究所に招かれて英語で演説し、「わたしを右翼の軍事主義者と呼びたいなら呼べばいい」と言った。これは総理のために演説を書

いたものらが「わたしたちは右翼でも軍事主義者でもない」と確信しているからです。

安倍でも高市でも石原でも橋下でも百田でも、だれでもいいから、こいつは凶悪だとおもう人物に実際にあつて、「あなたは何ですか」と聞いてみれば、きっと「保守です」とこたえる。

わたしたちはファシズムがなんなのかよく知らない。だから「ファシスト」を蔑称としてつかう。「やつらはファシストだ！」は敵を罵倒する台詞です。

実際に、共産主義者にとっては社会主義者は「社会ファシスト」なんです。そして、だれもが「こいつらこそファシストだ」とおもうグループにも、「あいつらこそファシストだ」とおもうまた別のグループがいる。

ファシストは善意の人だといいましたよね。じゃあ、ファシストはだれなのか。どこにいるのか。

ファシストはわたしたちです。わたしたちのこころのなかに、ファシストはちゃんと棲んでいます。

ようこそ、世界へ！

怨霊ナショナリズム論 (16) リベラルを狙え！

▽ 日本のファシスト思想と「われわれ対やつら」精神性について

反啓蒙主義からファシスト思想は生まれた。だからファシスト思想は啓蒙主義から生まれたリベラリズムや個人主義と対立する。

もし、ほんとうの保守やまともな右派なら、「君たちはそうかんがえるのか。だが、わたしはこうかんがえる」という態度をとる。あたりまえです。

しかし、ファシスト思想を奉じる怨霊どもはリベラリズムと個人主義を執拗に攻撃し、破壊しようとする。

リベラリズムと個人主義が日本社会を、日本の古き良き傳統を、日本文化を、ついに日本文明を滅ぼすと本気で信じているからだ。

▽ マフィアの手口

彼らは朝日新聞を攻撃する。わたしは朝日がりベラルだとおもったことは一度もないですよ。10年ほど前に、知り合いの研究者が「うちの学部では朝日はとっていません。左翼だから」と言ったときには、腹を抱えて笑った。

しかし、彼らは朝日はリベラルだとおもっている。だから攻撃する。NHKにもリベラリズムがまだある。だから押しえつけようとする。

辻元清美議員も攻撃される【1】。この人はリベラルだし、女だし、安倍内閣に楯突くし、さらにはフェミニストだ。だから怨霊どもの格好な標的になる。

人気ファッション雑誌「VERY」にも自民党広報室から脅されたそう【2】。なぜなら、秘密保護法問題や放射能問題や母性神話批判などを特集し、上野千鶴子のようなフェミニストや古市憲寿などの理性的な学者を起用するような「意識の高い母親」向けの雑誌はリベラルだからだ。

自民党の報道局長らが自民党記者クラブに所属する各テレビ局の責任者を個別に呼び出し、選挙報道について、口頭で警告し、文書を手渡して注意した【3】。

この文書の写真がネットに流れると、リベラル市民は「これは恫喝だ。言論封鎖だ。安倍内閣はなんてひどいんだ」と怒った。当然です。自民党のやりかたはマフィアの手口とまったくおなじ。

▽ メディアを甘やかすな

自民党や安倍内閣を批判するのはいい。じゃあ、どうして各テレビ局を批判しない。メディアを被害者にしたのはメディア自身です。

メディアはこの恫喝事件を報道することができたはずだ。自民党からうちの責任者が呼び出されて、恫喝された、こういう文書をわたされた、これは報道の自由を侵害するものだとして厳しく批判できるはずだ。

そういう批判報道を全国放送で行えば、もっとすごい、それはそれは怖ろしい恫喝を受けますよね。そうしたら、また報道すればいい。また恫喝されると批判する。大々的にキャンペーンを張る。そうすれば自民だって恫喝はできなくなりますよ。

かんたん。

そもそも、どうして自民党記者クラブに所属しているんだ。そんなのはジャーナリズムじゃないし、リベラリズムでもないぞ。

大企業のスポンサーから圧力がかかるくらいなんだ。報道番組の責任者やディレクターや報道局長の首が飛ぶくらいなんですか。たいしたことない。

何人か首になっても、また新しいものたちがキャンペーンをつづければいい。

リベラリズムはそうしてつないでゆくものです。しっかりしろ、メディア！

1. 打越さく良「真っ向から立ち向かうリベラルな女性は、リベラルな男性よりさらに攻撃の対象になる」

<https://www.facebook.com/sakura.uchikoshi/posts/10203411090902589?pnref=story>

2. セレブママ雑誌「VERY」を安倍内閣が検閲
<http://lite-ra.com/i/2014/06/post-173-entry.html>

3. <自民要望書問題>「現政権とメディアは完全な上下関係」田島泰彦教授イン

タビュウ

<http://www.bengo4.com/topics/2357/>

怨霊ナショナリズム論 (17) ヒトラーの反論

1933年3月23日、ドイツ。二日前に国会議事堂が全焼したために、ナチス連立与党はクロル・オペラハウスを臨時国会議事堂として、全権委任法案の審議をおこなった。

午後6時すぎ、ドイツ社会民主党党首のオットー・ヴェルスがこの日唯一の反対演説をする。ヒトラーは即座に反論してみせた。

読みやすいように、改行をいれますよ。

「遅れてやってきたものの、とにかくやってきたことは認めてやろう。

「おまえは迫害という。しかしおまえたちの迫害を牢獄で償う必要が無かった者はわれわれの中でごく少数に過ぎなかったのだ。われわれのほとんどが、おまえたちの手によって何千回となく嫌がらせを受け、弾圧された経験を持っている。

「色が気に食わないという理由だけで、何年もの間われわれがシャツを引き裂かれたという事実をおまえたちはすっかり忘れてしまったのか。おまえたちの迫害の中からわれわれは生まれたのだ。

「おまえは批判は有益だという。たしかにドイツを愛するものがわれわれを批判することは結構である。しかし国際主義に魂を売った者による批判を許すわけには行かない。われわれが野党の立場にあった時、おまえたちは批判の有益性とやらを認識すべきであったのだ。その当時われわれの新聞は繰り返し禁止され、集会も演説も同じであった。それなのに、今頃批判は有益だとはよくも言えたものだ。

「革命を続行するため国会の排除をわれわれが狙っているとおまえは言う。しかし、そのためであれば、われわれは選挙を行うことも、国会を召集することも、それに授權法を提案することも必要なかったはずではないか。

「この瞬間われわれが議会に求めていることは、たとえ諸君の同意が無くとも、どっちみち奪い取ることでできたものに他ならない。我々があえて法律的な手続きを踏むのは、今日われわれと異なった立場に立つにせよドイツに対する信仰を共有する人々をいずれは手に入れたいためである。

「反対者を抹殺するのではなく、彼らと和解するのではなく、ただ挑発するという愚を私は避けたかったのである。永遠の戦いをおっぱじめるようなことだけはしたくない。それはわれわれの弱さの故にではなく、民族に対する愛からに他ならない。

「おまえたちがこの法律に賛成しないのは、おまえたちの内奥のメンタリティが今日我々を鼓舞している意図を理解できないからに他ならない。私はお前達の票など欲しくない。ドイツは自由を手に入れる。しかし、それはおまえたちの手によってではないのだ」

南利明「民族共同体と指導者：憲法体制」『静岡大学法政研究』第7巻第2号、静岡大学、2002年、69-129頁。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/全権委任法>

▽ ファシスト革命

もし安倍晋三にヒトラーほどの言語能力があれば、まったくおなじことを、80年後の日本の国会議事堂で、いうとおもう。

自民政権の安倍内閣を代表として、過激な右派が政治運動を展開している。かれらが目指すものは革命である。これをかれらは「保守革命」と呼ぶ。

ほら、ヒトラーだって「革命」といつているでしょう。革命はなにも左派の専売特許ではありません。既存の政治体制や秩序に挑戦し、それらを破壊することによって利益を得て、政権を掌握し、まったくあたらしい体制をつくることを革命と呼びます。

1917年に、ロシアで起きたことだけが革命じゃない。この事件の反動として、1920年代から30年代に、ヨーロッパ諸国で起きたことも革命でした。

ファシスト思想を奉じる過激右派による革命です。

この思想は反啓蒙主義から生まれました。18世紀後半のことです。ファシスト思想の源流はイギリスのエドモンド・バークやドイツのヨハン・ゴットフリート・ヘルダーなどの思想家を元祖とする保守主義だ、と突き止めたのが歴史学者にして政治学者の狼ゼエブ・シュテルンヘールでした。

▽ ファシストの「国家」

過激右派にとっては、社会はすなわち国家であり、その国家は、個人のおつまりなどではなく、いのちをもった生命体です。国家には魂がある。それぞれの国家にはべつべつのいのちとべつべつの魂があると考えている。

かれらにとっては、これは明々白々な事実であり、まったく自然なことなんです。だから、世界のあらゆる文化はそれぞれにいのちがあり、それぞれが特有の完全性をそなえ、それぞれに唯一無比の言語や価値や伝統があり、それぞれに唯一絶体の制度や習慣があるものだ、と信じている。

すると、あらゆる価値はそれぞれに特有だし、それぞれの歴史が育んだ、ということになる。これは価値の相対化を意味します。

それぞれの国家にはそれぞれの本質があり、その純粋さは守られなければならない。その特性は讃えられるべきだとする。この思想こそが20世紀前半における革

命的右派の根本思想でした。

歴史や文化について、かれらのようにかんがえたり、なんとなくでもそう感じたりする人はいまでもたくさんいるとおもう。しかし、この思想が政治運動となる時、その到達点はなにか。

よそ者が同胞として受け入れられることは絶体でない。自分と異なる他者とは永遠に対立する。普遍的な価値など無意味だ。

運動はすすむ。人はそれぞれの国の歴史や文化や遺産の産物であり、独特の精神性をもつはずだ。あちらの国民とこちらの国民では性質や性格がまったくちがう。世界中の国はみんなバラバラで、どの国の国民性もバラバラだ。

こうして、わたしたちが理性によって獲得した普遍的な人間性という概念なり思想は破壊されます。

啓蒙主義から生まれたリベラリズムは次のようにかんがえる。市民の共同体が社会であり、この社会は憲法や何か実効性のある原則を遵守することによって成立している。

反啓蒙主義から生まれたファシスト思想では、このような個人の集合としての社会や国家は人工的なもので、法的フィクションに過ぎないと見なし、自分たちが信じる「自然」な国家には比べようがないほど墮落した国家だとかんがえる。

かれらの革命運動がここまですすむとき、なにが起きるか。あらゆる差別が可能になる。ありとあらゆる排除や分離や隔離が起こり得る。

そして「最終的解決」もついには可能になる。

▽ 安倍晋三の「国家」

ここで安倍晋三著『美しい国へ』から「国家」についての文言を引用します。

「国家、すなわちネーションとは、ラテン語の「ナツィオ」が語源だ。中世のヨーロッパでは、あちこちからイタリアのボローニャにある大学に学生が集まってきた。大学の共通語はラテン語だが、同郷の仲間とつどうときは、自分たちの国の言葉で話した。そして酒を酌み交わしたり、歌を歌ったりしながら、故郷をなつかしんだ。どこで生まれ、どこで育ったのか、同じ民族でその出自を確認しあうのだ。その会合を「ナツィオ」とよんだのである。

「では、自分たちが生まれ育った郷土にたいするそうした素朴な愛着は、どこから生まれるのだろうか。すこし考えると、そうした感情とは、郷土が帰属している国の歴史や伝統、そして文化に接触しながらはぐくまれてきたことがわかる。

「とすれば、自分の帰属する場所とは、自らの国をおいてほかにはない。自らが帰属する国が紡いできた歴史や伝統、また文化に誇りをもちたいと思うのは、だれがなんといおうと、本来、ごく自然の感情なのである。

・・・中略

「はじめて出会う外国人に、「あなたはどちらから来ましたか」と聞かれて、「わ

たしは地球市民です」と答えて信用されるだろうか。「自由人です」と答えて、会話がはずむだろうか。

かれらは、その人間の正体、つまり帰属する国を聞いているのであり、もっといえば、その人間の背負っている歴史と伝統と文化について尋ねているのである。

・・・中略

「ここでいう国とは統治機構としてのそれではない。悠久の歴史をもった日本という土地柄である。そこにはわたしたちの慣れ親しんだ自然があり、祖先があり、家族がいて、地域のコミュニティがある。その国を守るということは、自分の存在の基盤である家族を守ること、自分の存在の記録である地域の歴史を守ることにつながるのである」

<https://www.s-abe.or.jp/analects/analects03/chapter3>

ね、だからいったでしょ。危ないって。

怨霊ナショナリズム論（番外）のんきな知識人

日本の知識階級はのんきだ。英語でいう educated class とは一般に研究者やジャーナリストを指す。よくわたしは「知識人」を蔑称としてつかうけど、ちゃんとわかっていないといけないこの人たちに危機感が足りない。

リベラル市民が抱く危機感が高い。だから「とりあえず自民以外で」と、瀬戸際作戦どころか、背水の陣を敷いているんだ。数多くの選挙区で、これがどれほど苦汁に満ちた選択を強いることか。わかっているのかな、知識人のみなさん？

と、文句を言ってもしかたない。強靱なりベラリズムを社会に育み、維持できなかったのはわたしたち大人すべての責任です。

筋金入りのリベラルはたしかにいる。中野晃一や内田樹には強い危機感がある。しかし、どこかのんきな研究者もおおい。「中曽根とは、意見はちがっても、まだ話しはできた。だが、安倍たちには知性も教養もない。なにもわかっていない。話しが通じない」とあきれ果てている。

現場で戦っている法律家や活動家やリベラル市民は必死だ。そんなふうに片ほほでわらったりはしない。

あのね、宮台真司くん、安倍ちゃんたちをバカにしてるのか、それとも脅威だと見なしているのか、どっちだかわかんないぞ。しっかりしなさい。

怨霊ナショナリズム論 (18) ゴーストライター

はじめて安倍晋三著『美しい国へ』を読んだとき、だれが書いたのか知りたいとおもった。安倍が書いていないことだけはたしかだからだ。

当用漢字もろくに読み書きできず、貧しい言語能力しかもたない人物にまとまった文章がかけるわけがない。もし小学三年生に原稿用紙300枚の作文を書けといいつけたらどうなりますか。拷問です。

この本が出版された2006年7月には安倍晋三は小泉内閣のもと官房長官だった。そして同年9月、第90代内閣総理大臣に就任している。すでに安倍ブレーンと呼ばれる取り巻き知識人が何人かいたはずだ。

目星は簡単についた。数人で分担しているかもしれないが、中心となったのは、おそらく、八木秀次（麗澤大学教授）である。内容も文体も八木の書き物によくしている。

八木が明治聖徳記念学会紀要、復刊第20号（1997年4月15日）に「近代憲法における人間像について」という論文を寄稿している [1]。当時、八木は高崎経済大学の専任講師だった。

この論文と『美しい国へ』の文章をくらべてみよう。

▽「地球市民」は信用できるか（『美しい国へ』 pp. 90～2.）

国家、すなわちネーションとは、ラテン語の「ナツィオ」が語源だ。中世のヨーロッパでは、あちこちからイタリアのボローニャにある大学に学生が集まってきた。大学の共通語はラテン語だが、同郷の仲間とつどうときは、自分たちの国の言葉で話した。そして酒を酌み交わしたり、歌を歌ったりしながら、故郷をなつかしんだ。どこで生まれ、どこで育ったのか、同じ民族でその出自を確認しあうのだ。その会合を「ナツィオ」とよんだのである。

では、自分たちが生まれ育った郷土にたいするそうした素朴な愛着は、どこから生まれるのだろうか。すこし考えると、そうした感情とは、郷土が帰属している国の歴史や伝統、そして文化に接触しながらはぐくまれてきたことがわかる。

とすれば、自分の帰属する場所とは、自らの国をおいてほかにはない。自らが帰属する国が紡いできた歴史や伝統、また文化に誇りをもちたいと思うのは、だれがなんといおうと、本来、ごく自然の感情なのである。

前章でわたしは、パスポートの例をあげて、《わたしたちは、国家を離れて無国籍には存在できないと述べた。しかしそれは、旅行の便宜上のことばかりではない。そこに横たわっている本質的なテーマとは、自分たちはいったい何者なのか、というアイデンティティの確認にほかならない。

外国にすんでいたり、少し長く旅行したことのある人ならわかるだろうが、ただ外国語がうまいというだけでは、外国人は、深く打ち解けたり、心を開いてくれるこ

とはしないものだ。伝統のある国ならなおさらである。

心の底から、かれらとコミュニケーションをとろうと思ったら、自分のアイデンティティをまず確認しておかなければならない。なぜなら、かれらは《あなたの大切にしている文化とはなにか》《あなたが誇りに思うことは何か》《あなたは何に帰属していて、何者なのか》——そうした問いをつぎつぎに投げかけてくるはずだからだ。かれらは、わたしたちを日本人、つまり国家に帰属している個人であることを前提としてむき合っているのである。

はじめて出会う外国人に、「あなたはどちらから来ましたか」と聞かれて、「わたしは地球市民です」と答えて信用されるだろうか。「自由人です」と答えて、会話がはずむだろうか。

かれらは、その人間の正体、つまり帰属する国を聞いているのであり、もっといえば、その人間の背負っている歴史と伝統と文化について尋ねているのである。

▽ 八木秀次「近代憲法における人間像について」p. 37.

・・・今日では個人主義の”原理主義”とでも言っているような極端な主張が様々な場面で展開されている。

例えば、夫婦別姓の導入をはじめとする民法改正の主張はその典型である。これを一言でいえば、家族共同体から個人の解放を求めた主張である。ここにいう家族とは大家族だけでなく、核家族も含むが、妻が個人としての存在主張を始め、家族からの解放を求める。あるいは、妻という役割あるいは母という役割を投げ捨てて、単純な負荷のない個人という存在でありたいと主張し始める。今日、民法改正論として主張されているのは、こうした家族共同体からの個人の解放である。

その他にも個人主義の発想は多々見られるが、定住外国人の参政権の問題、あるいは公務就任の問題、これもその一つである。これを主張している「在日韓国人」あるいはこれを支援する「在日日本人」、この何れも国家に帰属するという意識がきわめて希薄である。「在日韓国人」は韓国という国会に対して法的に帰属するという意識が希薄であり、同時に日本という国家に対する帰属意識も希薄である。「在日日本人」のほうも日本という国家に対する意識が希薄であるということであって、何れも国家からの解放あるいは国家から解放された存在、国籍なき存在を求める動きであろうと理解できる。これも広い意味での個人主義的な発想に基づいている。

先の大戦の評価をめぐる歴史認識の問題も、国家の歴史や伝統を背負わない、あるいはその意識が希薄であるがゆえに、また簡単に反省や謝罪ができてしまう。もっと言えば、日本という国家の歴史や伝統には帰属したくない、自分は別ものでありたいという意識の現れではないかと考えられる。

▽ 八木、同 p. 44.

・・・国家を否定するという特殊「戦後」的な発想から、さらに、これに近年プラスされた国際化の風潮から、国家という枠組みを超えて、国家という枠組みから解放された「個人」という存在を求めようとする。

例えば、故・丸山真男がかつてある雑誌のインタビューで大略次のように答えているのを読んだことがある。日本から外国へ行くときが（当時は国際空港は羽田しかなかったのだが、つまりは羽田から飛行機が飛び立つ瞬間が）一番自分は嬉しい。それはこの日本から離れることができる、日本という国家から自分が離れることができる、日本から逃れることができるからだ。丸山氏はこのような発想をしていた人である。今日、国際化・ボーダレスなどというわかったようでわからない甘い言葉に踊らされて、多くの人々が丸山氏ほど確信犯ではなくとも同様の発想をし始めている。「地球市民」などと称して、国家を否定し、国家の枠組みを越えることが進歩であるかのように考えているのである。・・・

▽ 対立する二大思想潮流

八木論文も『美しい国へ』の一節も「国家・帰属・歴史・伝統」をキーワードにしている。「地球市民」がきらいらしい。わたしはそんな人に出会ったことはないけど。

『美しい国へ』は広範な読者を想定しているので、やわらかい表現を心がけているし、夫婦別姓問題や外国人参政権など議論を招く話しは避けている。しかし言っていることは八木論文とおなじだ。

どちらにも、リベラリズムおよび個人主義を蔑視している。八木は丁寧に誤解したうえで蔑視しているわけだが、この蔑視なり反発はリベラリズムを生んだ啓蒙主義と、ついにはファシスト思想を生んだ反啓蒙主義の対立する国家観に根ざしている。

八木は反啓蒙主義のはじまりについても、ちゃんと言及してくれる。

▽ ファシスト思想の源流

論文から引用します。アトミズムというのはみんなバラバラの個になる「個人主義」のことです。

>もとより、アトミズム的な発想への批判は古くからあり、例えば保守主義の開祖とされるエドモンド・バークの考え方にもある。周知のようにバークは国家を、過去に生まれたもの、いま生きているもの、これからも生まれてくるもの、つまり、祖先、現在の我々、そして子孫、これら三者の共同事業だと捉えている。祖先から我々を経て子孫たちへ伝えていく存在として国家というものを考えている。時間的な共同性というものを考えている。したがって、この保守主義の発想からすれば、現在の我々が先祖の偉業を容易に台無しにしてはならないとか、子孫たちに負担を強いるようなことを、我々の現在の楽しみとしてはならないということが説かれることになる。・・・< pp. 50 ~ 1.

八木は名前を書き間違えているが、エドマンド・バーク Edmund Burke は18世

紀後半に活躍したイギリスの思想家である。八木のいうように保守主義の祖と呼ばれている。

そして、このバークこそ、ドイツの思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーとともに、狼ゼエブ・シュテルンヘールがファシスト思想の源流と見なす歴史上の人物である。

たどり着いた。

怨霊ども、なんでも書いてこい。わたしがすべて読んでやる。

*

1. 八木秀次「近代憲法における人間像について」

<http://www.mkc.gr.jp/seitoku/pdf/f20-3.pdf>

怨霊ナショナリズム論 (19) ファシスト革命

山崎雅弘の論説がおもしろい [1]。この紛争史研究者は<既に「争点」として論じられている個別の問題よりも、むしろ「現政権が最終的にこの『国』をどんな形へと作り替えることを目指しているか」を重視して、一有権者としての「総合的評価」を行う>という。

そして、社会の変化に注目する。

>>引用はじめ

第二次安倍政権が発足してから、日本国内がどのように変化したのか。以下は私の主観ですが、発足前と較べて「変わったな」と思う点をリストアップしてみます。

●人種差別や民族差別など、偏見と差別を堂々と主張する攻撃的・排外的な言説（いわゆるヘイトスピーチ）が増え、ネット上だけでなく路上でも公然と叫ばれるようになった。

●特定の国を名指しして国民や慣習を貶め、その国の前途が悲観的・絶望的であるかのように描いた本が数多く出版され、書店の目立つ場所に並ぶようになった。

●「日本」や「日本人」を礼賛する本やテレビ番組が急激に増加した。

●政治家が、1945年8月（敗戦）以前の「女性観」に基づく役割分担への回帰を、公然と語るようになった。

●「国境なき記者団」が発表する「言論の自由度ランキング」で、日本は再び50位以下に転落した（50位以下は過去3回、2006年、2013年、2014年でいずれも安倍政権）。

●公共放送の会長や経営委員など、現政権との親密な関係で社会的な優位に立つ側の人間が、傲慢な態度を隠さなくなった。暴言を吐いても地位を失わなくなった。

- 公共放送のニュース番組が、首相や政府に対する批判的内容を一切報じなくなり、逆に首相や閣僚のコメントはたつぷりと時間をとって丁寧に報じるようになった。
- 大手新聞社や在京テレビ局のトップが、首相と頻繁に会食するようになった。大手芸能事務所の社長やプロデューサー、大手出版社の社長も、首相と親密な関係を結び始めた。
- 「国益」「売国」という言葉が大手メディアや週刊誌で頻繁に使われるようになった。
- 政府に批判的な人間への威圧・恫喝・見せしめのような出来事が増えた。
- 首相が国会で名指しして批判した新聞社の関連人物を雇用する大学に対し、無差別殺人を予告する脅迫が行われたが、首相も国家公安委員長もこの脅迫行為を非難しなかった。
- ヘイトスピーチを行う団体の幹部と現職閣僚（一人は本来そのような団体を取り締まる立場の国家公安委員長）が、政治思想面で共感し合っていることを示す団体機関紙記事や記念写真などがいくつもネット上に流出した。
- 天下りや家賃が優遇される官舎など、民主党政権時代には頻繁に行われていた、官僚の特権的境遇や税金の無駄遣いに関する大手メディアの批判的報道がパッタリと止んだ。

首相と現職閣僚の靖国神社参拝や慰安婦問題の矮小化などによる、近隣諸国との軋轢増大や海外メディアからの批判は、ここでは「国外の問題」として除外しましたが、上に列挙したような国内の変化のほとんどは、首相自身や閣僚、および彼ら・彼女らと親密な関係を持つ作家や評論家、政治活動家が直接的に関わって生じているものと言えます。

<<引用おわり

山崎は自分の主観だといっているが、客観的な観察だともう。わたしもおなじよに見ている。

よって、山崎は第二次安倍内閣の本質は「戦前・戦中の国家体制の肯定と是認」にあると分析する。そして、安倍首相をはじめとして閣僚のほとんどが「国家神道系の宗教的政治団体」である日本会議国会議員懇談会や神道政治連盟国会議員懇談会などに所属していることを指摘しながら、

>日本会議や神道政治連盟などの宗教的政治団体は、戦前・戦中の体制に対する批判的認識を一切受け入れず、逆に戦前・戦中体制の復活を目指すことこそが、日本にとって唯一の「愛国の道」であるかのような政治宣伝を、現政権の成立後は特に活発に行っています。<

と解説している。これも事実だ。

▽ 特殊か普遍か

山崎は安倍内閣が現代日本社会に復活させようとしている戦前戦中体制について

次のように述べる。

>戦前・戦中の「国家神道」体制は、日本の長い歴史上ただ一度、国の主権を外国に譲り渡すという悲惨な「敗戦」をもたらした国家体制で、実際にはわずか10数年ほど日本の政治を支配したに過ぎない「一過性」の現象でした。「日本の伝統」でもなければ、唯一の「愛国の道」でもありません。むしろ、日本という国を滅亡の淵へと導いた「亡国の体制」でした。<

ここで山崎とわたしの意見はわかる。戦前戦中の国家体制は一過性の現象じゃない。

歴史政治学者ゼエブ・シュテルンハールによると、18世紀中ごろヨーロッパ社会に誕生した啓蒙主義への反動として同世紀のおわりに保守主義が起き、この保守主義が源流となってファシスト思想が生まれた。

だから帝国日本のファシズム体制も過去に十数年間だけ起きた社会現象ではない。ヨーロッパでも起きた。アジアの片隅でも起きた。

昭和初期のファシスト体制は日本社会に蔓延しリベラリズムを駆逐していったファシスト思想が生み出したものであり、そのファシスト思想は反理性的な保守主義をその源流としていたとかがえられる。

啓蒙主義が起こってから、反動として保守主義が生まれ、ヨーロッパにさまざまなファシスト運動やファシスト体制があり、ついにはファシズムよりもさらに凶悪なナチズムが現れて人類と人間性と普遍的価値に対する挑戦をはじめるとまで、2世紀ほどかかっている。

20世紀のはじめに、ロシアで起きたことが左派による革命なら、その反動として、ドイツやフランスやイタリアなどヨーロッパ諸国で起きた過激右派による運動も革命である。

ファシスト思想は、すくなくとも世界の近代史において、国民国家の時代とともにある普遍的な社会現象だと見なしたほうがいい。

▽ これからの戦い

このアジアの果ての島国でも、江戸時代末期にはファシスト思想の源流がはじまっていたかもしれない。

日本のファシスト思想は戦前戦中に生まれたわけではない。敗戦とともに死んでもいない。原爆に焼かれてもいない。平和憲法によって葬られてもいない。

敗戦後の平和と繁栄の影にかくれ、文化や社会の片隅に棲み、ちゃんと息をしていた。そのまま眠りについてくれればよかったが、さまざまな経済的・社会的・文化的条件が重なって、怨霊どもがいま目を覚ました。

リベラリズムがファシスト思想を社会の片隅へふたたび押し返すまで、この戦いはつづく。おそらく、これから20年ほど。あるいは、30年ほど。

1. 山崎雅弘 <【総選挙2014】首相が「どの論点を避けているか」にも目を向けて

[みる](#) >

<http://politas.jp/articles/240>

怨霊ナショナリズム論（番外）選挙へ行こう！

選挙だけでは社会はかわらない。だが指標にはなる。リベラリズムが一步前進するか、一步後退するかだ。もちろん、現状維持は一步後退にひとしい。

選挙だけでは勝負はつかない。ながいながい戦いはいまはじまったばかりです。

ファシスト思想はいつだってわたしたちといっしょに息をしている。わたしたちのこころのなかにもファシストがいるかもしれない。

大正中期から台頭したファシスト思想が昭和初期になってリベラリズムを社会から駆逐したとき、日本社会は破壊と滅亡へと暴走をはじめた。だれも止められなかった。

ファシスト思想は人と人を分かち、国と国を断ち、人類を分断する。リベラリズムは人と人を結び、国と国をつなげ、人類の連帯を誓う。

ファシスト思想は18世紀のおわりに起きた保守主義の国家観から生まれた。人は郷土に生を受け、親族や同胞とともに郷土に暮らし、いずれ死ねば郷土の「土」に帰る。郷土は祖先から受け継いだものであり、過去と現在をつなぐものは「血」と「土」だ。

この「血」と「土」の延長が仮想としての「郷土」であり、ファシストの「国家」となる。

ファシスト思想は民族・言語・文化・伝統・宗教・歴史を原理として神聖化する。それぞれの国にはそれぞれの民族がいて、固有の言語と文化があり、べつべつの宗教やさまざまな伝統を継承している、とかんがえる。

みんなばらばらなんだから、普遍的な価値が認められる余地はない。ここからありとあらゆる差別が生まれ、分離・隔離・弾圧が可能になる。やがて、破壊と虐殺がはじまる。

リベラリズムが提唱する自由や平等や人権、正義や個人主義や民主主義という理想や普遍的な価値は誤解され侮蔑される。いま攻撃されている。

リベラリズムは自民党にもある。ファシスト思想は民主党にも維新の党にも次世代の党にもある。

もう政党は関係ない。わたしはリベラリズムに投票する。

▽ 新しい社会

ファシスト思想とリベラリズムの戦いはこれからも長くつづく。しかもこの戦いは資本主義システムが終焉と重なる。断末魔の資本主義システムはきっと凶暴化する。その傾向は80年代からすでに見られる。

資本主義システムのつぎに訪れる世界システムがどのようなものになるかは誰にも予想できない。しかし、ひとつ確実にいえることがある。

次のシステムがいまのシステムと比べて、より自由で、より公平で、より平等で、より民主的なものになるか、より不自由で、より不公平で、より不平等で、より非民主的なものになるか。二つに一つしかない。

すべてはわたしたちの意志と行動にかかっている。

新しい社会を築くのはいつでもどこでも若者たちだ。かれらに期待しよう。上の世代は先に退場してゆく。だからいま、ひとりひとりができるときに、でいるだけのことをして、次の世代にバトンをわたせばいい。

わたしたちには味方がたくさんいる。ファシストどもに負けるわけがない。まだ生まれていない子どもたちもわたしたちの味方だ。

この子たちが生まれて、20代の若者に成長するとき、日本は新しい社会を迎える。きっと、そうなる。

新しい社会はもうこちらへ向かって歩きはじめている。今日みたいに天気の良い日に、耳を澄ませば、足音が聞こえます。ほら。

怨霊ナショナリズム論 (20) 個人へ帰る

こまったときや元気がなくなったときは「個人」へ帰りましょう。だって「個人」が出発点だから。

わたしたちは「個人」ということばをよくつかいますよね。「わたし個人としては・・・」「これは個人的な見解ですが・・・」「それは個人個人の問題だ」というように。

じゃあ「個人」とはいったい何者でしょうか。

18世紀の啓蒙主義がおこたえいたします。『百科全書』L'Encyclopédieにおいて、ふつう「国家」と翻訳されている the nation がどのように定義されているか、もういちど見てみましょう。

“une quantité considérable de peuple, qui habite une certaine étendue de pays, renfermée dans de certaines limites, et qui obéit au même gouvernement.”

「特定の境界線に囲まれた特定の土地に住み、同じ統治権に従う相当数の人びと」

国家とは国民のことでした。そして、この定義のなかに「個人」がいます。国民を

定義するときに、理性のちからによって、注意ぶかく排除されたものがある。あえて、排除されたものを書き出してみますよ。

「髪の色も目の色も肌の色もことなり、生まれ育った土地もまちまちで、さまざまなことばを話し、ことなる宗教を信じ、あるいは宗教は信じず、ことなる文化を持ち、それぞれの歴史を持つ人びとが同じ領土に暮らし、自分たちのために、自分たちを自分たちで統治し、ともに生きる」

啓蒙主義のいう「個人」とは、郷土や民族や言語や文化や習慣や伝統や宗教や歴史に規定されない「人」、本質的には何のものにも帰属しない「人」のことです。

この「個人」はどこかの「国民」かもしれないけれど、「国家」や「政府」には帰属しません。ただし「国民」として、憲法や実効的な約束にしたがい、他の「個人」とともに生きると決意した「人」です。

このような「人」は不自然なんだ。わたしは先祖代々が築いた郷土に生まれ、この郷土を守り、この郷土に死んでゆく人だ、というほうがよっぽど自然だ。

しかし、これが啓蒙主義の「個人」なんです。ものすごく不自然で、実際には存在しえない「人」です。だって、わたしたちは、人の子であり、親であり、日本人であり、日本語をはなし、文化があり、歴史があり、伝統があり、会社員であり、職人であり、八百屋であり、どこかの党员であり、学生であり、非正規社員であり、フリーターであり、サッカーファンであり、野球ファンであり、過去も現在も未来もある普通の人間なんです。ありとあらゆるものに規定されている。さまざまな共同体に帰属している。

個人とは理想の存在です。そんなものはいない。だからファシスト思想は個人など認めない。侮蔑する。おまけに攻撃する。

たしかに個人は架空の存在です。理想だ。でもね、この個人は裸じゃない。

個人は自由です。平等と正義を体現している。生まれながらに人権を持っている。自己決定権がある。民主主義を担う。あらゆる普遍的な価値を身に纏っているのが個人だ。

ね、かつこいいでしょう。なにかわからなくなったら、個人に帰りましょう。きっと何かを発見します。たとえば、勇気とか。

怨霊ナショナリズム論（番外）クリスマスはリベラルに

John Lennon, "Happy Christmas: War is Over"

https://www.youtube.com/watch?v=_EA_jnrQ7kA

これを超えるクリスマスソングがいまだに書かれていないのは不幸か幸福か。

1980年、12月8日の夜、わたしは州立大学の学生寮でターム・ペーパーを

書いていた。英語がへたくそなので、いつも苦勞した。

アメリカ人のルームメートは留守だったとおもう。だから、ラジオの音を小さくして聴いていた。どうせまた徹夜になる。

午前0時を越えると、ラジオからはビートルズの曲が流れ出した。それがずっとつづく。不思議におもって、他のラジオ局へまわしてみても、みんなビートルズだった。中西部の田舎町でつかまえられるラジオ放送はことごとくビートルズづくしになった。

曲の合間にはDJやゲストがジョンやビートルズの思い出ばなしをしている。まぬけなわたしはビートルズが再結成されるのかとおもった。

夜が明ける。ペーパーもなんとかでっちあげて、ぼんやりしていると、留学仲間の悦郎が部屋に飛び込んできた。

「アンノさん、ジョン・レノンが死んじゃったよ！」

その日は試験勉強そっちのけで、一日中、ふたりしてビートルズのCDを聴きました。

▽ 追いかける！

ジャズやブルース・フォーク・ロック・ポップにはリベラリズムがある。当たり前です。民衆の歌だからだ。

気分よく軍歌を歌うおとうさん、そういうのはリベラルじゃないですよ。ワーグナー好きはどうか。やっぱり、あぶないか。

もしジョンがいまニューヨークに生きていたら、すごい歌を書いたとおもう。忌野清志郎が生きてくれたらと、おもったこともあった。

ファシスト思想との長い戦いはいまはじまったばかりだ。これからの10年、リベラリズムは危機を迎える。しかし、最後に勝利するのはわたしたちリベラルにちがいない。それはすでに歴史が証明している。

だから、ファシスト思想が社会にもたらす被害をどれだけ小さく抑えるかが課題となる。それはわたしたちがどれだけ速く、どれだけ強靱に、リベラリズムを立ち直らせるかにかかっている。

きっと30年後には日本も世界も新しい社会を迎えているでしょう。資本主義システムも終焉し、より自由で、より平等で、より公正で、より民主的な経済システムへ移行しているはずだ。それまでの苦難の日々に、わたしたちを勇気づけてくれるのが歌です。

詩人やミュージシャンはみずからが属する共同体のために歌をつくる。もちろん、ジョンのように人類というでっかい共同体に生きる天才もあらわれる。

詩人やミュージシャンがたくさんいる社会はよりよい社会だ。わかい才能に期待したい。

ジョンを追いかける！

怨霊ナショナリズム論 (21) 市民運動と陰謀論カクテル

12月のはじめに、小さい市民集会でアイスランドの記録映画が上映されると聞き、見に出かけた。

2008年の経済危機を契機として、アイスランドで起きたことは英語の記事を読んで大まかなことは知っていた。だが、ひさしぶりに市民の集まりを見てみたかった。

映画の邦題は「～アイスランドに学ぶ～ アイスランド無血革命：鍋とフライパン革命」となっていた。これはちがう。革命ではありません。アイスランドは既存の制度や法律も有効なものを残し活用している。2008年以降に起きたことは民主化運動です。

英語のタイトルを見ると、"Pots Pans and Other Solutions" となっているから、「鍋とフライパンと他の解決策」としたほうがいい。

<https://www.youtube.com/watch?v=GtzbWxb9nuQ>

記録映画鑑賞集会には「講師」が来ていて、わたしが席に着いたときには「お金」について話しをしていた。アイスランドの民主化運動とマネーがどう関係しているのか。ふしぎにおもって話を聴いていると、おどろいたことに、陰謀論を語っているではないか。しかも、さまざまな陰謀論を混ぜ合わせたカクテルになっていた。

- ・ ロスチャイルド家世界支配説
- ・ ユダヤ世界金融資本世界支配説
- ・ 中央銀行世界支配説
- ・ 日本銀行貴族支配説
- ・ 民間銀行通貨発行説
- ・ 英国王室世界支配説
- ・ ビルダーバーグ会議世界支配説

ロックフェラーやイルミナティやフリーメイソンなどに関する話しはなかったとおもう。市民集会に出て、どうして陰謀論カクテルを勧められることになるのか。

しかも、おどろいたことに、愕然としているのはわたしだけで、集会の司会者も世話人も参加者も、だまって静かに聴いている。わたしの隣のわかい女の人は熱心にメモをとっていた。

これは最初から何も知らないか、少なくとも、そういうことがあるかもしれないくらいにおもっているからだろう。

映画が終わったあとにも陰謀論講義がつづいた。いまアイスランド民主化運動について記録映画を見たのだから、みんなで民主主義について話合えばいい。そして、アイスランドから何を学ぶべきかをかんがえればいい。それなのに、また陰謀論カクテルだ。

最後に講師は独自に考案した社会システムの図を見せてくれた。円錐形を描いている。頂点の指導者ひとりに絶大な権限をあたえ、その下に善良な代表グループを置き、その下に有能な官僚組織を置き、最下部が一般市民となっていた。

なぜそうなる。

ピラミッド型システムがもっとも効率的だという。はい、そうです。効率的にはちがいない。そのピラミッド型の統治システムを独裁制や専制政治という。なにも新しくはない。

いま映画で見たじゃないか。民主主義というのものはものすごく面倒くさいんだ。そして映画では権力はできるだけ分散させたほうが良いと言っていたでしょう。政治家や指導者に任せるのじゃなく、市民がかんがえて、話しあって、行動するのが民主主義です。

▽ なぜ陰謀論に感染するのか

講義を終えた講師が質問をうけつけた。だれも手をあげない。なにも疑問はないのか。

そこで、わたしが手を上げて意見をのべた。

「あなたは映画とはまったく関係がない話しをしている。むしろ逆だ。それはみんな陰謀論です。陰謀論はなにも解決しない。わたしたちを救わない。だれも幸せにしない」

金本位制が廃され、変動為替相場制が採用されるようになってから、通貨（マネー）がどのような機能を持つようになったか、財務省と中央銀行がどのように役割を分担しているかについてはマクロ経済を勉強すれば大体のことはわかる。

アメリカには80年代にはじまった Modern Monetary Theory という学派があり、通貨論に詳しい。それを勉強すればいい。

経済だけでなく、政治や外交や軍事について、基礎だけでもいいから、体系的な知識を積んでおけば、陰謀論に惑わさることはない。

それぞれの分野で評価が高い本はすぐに見つかる。各分野ごとに、まず3冊も読めば、つぎの10冊は何を読めばいいかがわかる。

これに対して講師は「いまみんな本を読まなくなったから・・・」という。

「なぜ市民をあきらめるのですか。本を読もうって、はげましあえばいいでしょう」

陰謀説から自分を守るには勉強して世界の現実を知るしかない。インターネットをいくらさまよっても、そんな知識は得られない。

すると最前列にすわっていた女の人が振り向いて、次のようなことをいった。

陰謀論と呼ぶこと自体がまちがっていると。陰謀論と呼ぶことによって、新しい探求を最初から否定することになると。これは新しい発見であり、あたらしい知見なんだと。

なるほど。しかし陰謀論にふるいもあたらしいもない。ユダヤ人グループを首謀者とする陰謀論は何百年も前からある。ナチスドイツはそれらの陰謀論を利用した。

ただ、陰謀論という呼び方がいけないということには賛成したい。不適切だ。もっと簡明で、実態に即した呼び名がある。妄想と呼ばばいい。

知識や教養が価値をうしない、知性や理性がちからをなくすとき、陰謀論は蔓延する。そしてすさまじい感染力を持つようになる。

▽ 免疫の喪失

わたしたちにあたえられた時間には限りがあるから、あらゆる分野で専門家にはなれない。それでも、静かなところと、ふつうの判断力があれば、陰謀論なんか怖くない。そんなバカな、アホかいな、ですんでしまう。荒唐無稽の妄想だからだ。

しかし、怒りにかられるとき、不安にさいなまれるとき、不信におちいるとき、恐怖にふるえるとき、わたしたちは正常な判断も批判的な思考もできなくなり、免疫をうしなう。

ファシスト思想とおなじように、陰謀論には右も左もない。ネトウヨや狂信ナショナリストだけが感染するわけじゃない。よりよい社会を求めて、市民集会にあつまる善良な人びとにも、善良だからこそ、伝染する。

陰謀論は危険だ。

次回から、時間をかけても、陰謀論の定義と特性を解説し、陰謀論の危険性・市民運動へ及ぼす被害・陰謀論と全体主義およびファシスト思想の関係について書いてゆく。

怨霊ナショナリズム論（番外）絶望と詩集

今日は深く絶望したので、新宿の本屋へ行くことにした。人によって絶望にもいろいろとあるだろうが、わたしの絶望は怒りに似ている。こうなると、同じことをグルグルまわしに考えつづけて、どうにもならなくなる。だから散歩するか、本屋か図書館へ行く。

12月に、アイスランドで成功した民主化運動のドキュメンタリー映画を見に市

民集会へ行って、これが世界の真相なんだと陰謀論を講義されたときも絶望した。陰謀論という妄想に惑わされるなら、わたしたちは世界に対しても、未来に対しても、盲目になる。

それから、ささやくように歌うシンガーソングライターのライブを聴きに行ったときにも、軽く絶望した。シンガーのせいじゃない。開演の直前に隣のテーブルにいた人がその友人に、もう民主主義はだめだ、つぎにできる政治体制がなんになるかはわからないけど、民主主義でないことは確かだ、と言っていたからだ。

どういうことかと話しを聞いてみると、民主主義は薄汚れてしまったという。だから呼び名をかえたほうがいいという。じゃあ、デモクラシー・パート2とでも呼ぶのですか。それがいったい何になる。

民主主義は理想です。まだ完全には実現していないものを理想という。わるいのは民主主義じゃない。果てしなくだめになってしまったのはこのわたしたちだ。

そして今日は、シャルリー・エブド襲撃事件とヨーロッパ社会について、また表現の自由について、日本の言論界がまともな論説をまだ出していないことに絶望した。なにをしている。はやく書くん。世界では質の高い論説がいくつも出ているぞ。日本には関係ないとでもいうのか。

言論界が日本社会をかえられるとはおもっていない。しかし、わたしたちは民主主義や人権や自由という理想について、突き詰めてかんがえたことがないのだから、サーチライトが必要になる。沈黙する言論なんて、意味ないじゃないか。

▽ これからのヨーロッパ社会

この事件を契機として、ヨーロッパ社会では、ファシスト思想を奉じる過激右派政党が躍進する。それに対抗するために、中道右派も中道左派も右傾化してゆく。わたしとおなじことをいう人はきっと多いとおもう。

ヨーロッパ社会は、リベラル民主主義の価値や自由や権利をひとつひとつ捨て去り、全体主義体制へと次第に移行する。フランス全土で370万人がデモ行進し、国歌ラ・マルセイエーズを合唱したという。参加者にはそれぞれの思いがあっただろうが、後年、この大行進こそが全体主義国家の前兆だったといわれる日がくるかもしれない。

現に、いまパリには事実上の戒厳令が敷かれているが、パリ市民は受け入れている。自動小銃を抱えた武装警官がパリの風物となり、警察監視社会が日常となる。

十字軍の遠征まで遡らなくてもいい。だが、すくなくともオスマン帝国の衰退以来、ヨーロッパ諸国が中東と北アフリカのアラブ世界およびイスラム社会に対して行ってきた軍事・政治介入の歴史は学ぶ必要がある。しかし、もう本は読まず、政府や企業メディアの物語を聞いているなら、むごたらしい歴史はこれからも隠蔽される。ヨーロッパに根強くのこる植民地主義もさらに隠蔽される。

西ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国によるアラブ世界およびイスラム教圏に対す

る国家テロリズムは、「対テロ戦争」の名の下に、隠蔽されたまま拡大する。よって、先進諸国による国家テロリズムが生み出したイスラム過激派はなくならないし、むしろ増大する。過激派によるテロ攻撃も止まない。

移民やイスラム教徒に対する偏見や差別や憎悪や攻撃は増大する。現在のヨーロッパ社会は1930年代のヨーロッパによく似ているが、これから迫害のターゲットとなるのは、ユダヤ人ではなく、イスラム教徒だ。

表現や言論の自由を守るために大行進したはずなのに、政府や社会の多数派によって、逆に言論は統制されてゆく。

▽ これからの日本社会

在特会による在日コリアン攻撃デモがはじまったとき、リベラル派の市民は警察を批判した。警察はヘイトスピーチを容認しているのか、まるで在特会のボディーガードを務めているようだ、と批判した。

あれは第一段階だとおもう。つぎに警察は在特会を取り締まりの対象とする。大阪市や大阪府がヘイトスピーチ禁止条例をつくるかもしれない。こころやさしいリベラル市民はそれを歓迎するでしょう。そうして、政府権力や社会の空気によって、言論統制が次第に強化されてゆく

本から歴史として学んだファシズムやファシスト社会を現実に体験することになるとは思わなかった。

▽ 希望と本

夕方、帰りの電車の中、目が届く範囲に、老若男女15人が手のひらのスマートフォンを見つめ、パネルを親指でこすっている。それを見て、またすこし絶望する。

だが、わたしのすぐ前に座る中学生の少女が膝の上に本をひろげて熱心に読んでいた。まだ本を読む人はいるんだ。

この少女に勇気づけられて、陽が落ちてゆく街を歩いた。裸の両手が冷たくなった。でも寒くはない。

怨霊ナショナリズム論（番外）日本言論界の衰退

風刺新聞社シャルリー・エブド襲撃事件が起きた7日から14日までの一週間に、事件に関する質の高い論説記事を19本みつけた。すべて英文だ。

日本から配信されたものはひとつもなかった。ダメな記事なら、いくらでもありましたけどね。たとえば、朝日の社説だとか。

日本の知識階級（大学教授や研究者・新聞記者・評論家など）がすぐに対応できないのはなぜか。新聞や雑誌から依頼されないと書けないのか。関心がないのか。日本には関係ないことだとでもおもっているのか。それとも、事件を解釈するために必要とされる体系的な知識に乏しいのか。

たしかに要求される知識や教養は広範だ。ふだんから世界について、よく見て、よく知って、よくかんがえていなければ、すぐに何か書けるわけがない。

まず、ヨーロッパ社会の思想史、文化史にはじまり、ヨーロッパ諸国の植民地主義・帝国主義・人種偏見・少数派差別・宗教差別・移民問題について知っている必要がある。

すくなくとも、オスマン帝国の衰退期からこれまで、欧米諸国が中東・中央アジア・北アフリカ・中央アフリカにおいて、アラブ／イスラム世界に対し、行ってきた政治・軍事介入の歴史を知っていなければならない。

欧米諸国による国家テロリズムがアラブ／イスラム世界にどれほど甚大な殺戮と破壊をもたらしたか、それがどのようにしてイスラム過激派を生み育んできたかについて、正當に評価できる必要がある。

つまり、西側リベラル民主主義の偽善を知ってか知らずか隠蔽している日本の主流新聞社には無理だ。最初から期待していない。フィナンシャルタイムズ紙だって、ニューヨーカー誌だって、ひどい記事をだしているくらいだ。

わたしは日本の若手論客に期待した。しかし何もいいものは見つからなかった。15日になって、菊池恵介がレイバーネットから配信した論説には及第点をあげましょう。世界の右派や進歩派から見れば、平均点です。

わたしたちは敗戦後に70年をかけて、一所懸命に、知性や教養が評価されず、むしろ侮蔑される社会を築いてきた。言論界が衰退するのも当然かもしれない。

若手の論客が出て来ないと、これからの長い戦いはより厳しいものになる。

▽ リベラル神奈川新聞

地方紙には期待していた。神奈川新聞ならなにか出してくるだろうともおもっていた。16日の記事はすごくいい。

牧村朝子「私はシャルリじゃない パリ・デモ参加の牧村朝子さん」神奈川新聞、2015年1月16日。

http://www.kanaloco.jp/article/82844/cms_id/121308

パリの巨大デモについての報告を論説として、英文記事にもこういうものはまだない。牧村朝子は言論界の人ではないが、この人ならいいものが書けると神奈川新聞は判断した。

牧村朝子はりっぱだ。日本人として、ではなくて、人として誇らしくおもう。

▽ リスト

わたしがあつめたよい記事のリストを添付します。

Vidya Venkat, an email interview to Vidya Venkat, “Charlie Hebdo cartoons are bigoted,” The Hindu, January 15, 2015.

<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/charlie-hebdo-cartoons-are-bigoted/article6789470.ece>

牧村朝子「私はシャルリじゃない パリ・デモ参加の牧村朝子さん」神奈川新聞、2015年1月16日。

http://www.kanaloco.jp/article/82844/cms_id/121308

菊池恵介「<風刺の精神>とは何か?〜パリ銃撃事件を考える」レイバーネット、2015年1月15日。

<http://www.labornetjp.org/news/2015/0115kikuti>

Shalier Patel, “The funnies,” Pambazuka News, January 15, 2015.

<http://pambazuka.net/en/category/features/93716>

Jonathan Cook, “Yes, the new Charlie Hebdo cover is offensive,” the Blog from Nazareth, January 15, 2015.

<http://www.jonathan-cook.net/blog/2015-01-15/yes-the-new-charlie-hebdo-cover-is-offensive/>

Media Lens, “Charlie Hebdo and the War for Civilisation,” Alerts, January 15, 2015.

<http://medialens.org/index.php/alerts/alert-archive/2015/783-charlie-hebdo-and-the-war-for-civilisation.html>

Saumas Milne, “Paris is a warning: there is no insulation from our wars,” The Guardian, January 15, 2015.

<http://www.theguardian.com/commentisfree/2015/jan/15/paris-warning-no-insulation-wars-arab-muslim-world>

Green Greenwald, “France Arrests a Comedian for His Facebook Comments, Showing the Sham of the West’s ‘Free Speech’ Celebration,” The Intercept, January 14, 2015.

<https://firstlook.org/theintercept/2015/01/14/days-hosting-massive-free-speech-march-france-arrests-comedian-facebook-comments/>

Paul Street, “Charlie I am Not,” Znet Commentaries, January 14, 2015.

<https://zcomm.org/zcommentary/charlie-i-am-not/>

Dean Obeidallah, “Are All Terrorists Muslims? It’s Not Even Close,” thedailybeast.com, January 14, 2015.

<http://www.thedailybeast.com/articles/2015/01/14/are-all-terrorists-muslims-it-s-not-even-close.html>

José Antonio Gutiérrez Dantón, “JE NE SUIS PAS CHARLIE (I AM NOT

CHARLIE),” trans. rebelbreeze, January 13, 2015.

<https://rebelbreeze.wordpress.com/2015/01/13/je-ne-suis-pas-charlie-i-am-not-charlie/>

Mehdi Hasan, “As a Muslim, I’m Fed Up With the Hypocrisy of the Free Speech Fundamentalists,” The Huffington Post, January 13, 2015.

http://www.huffingtonpost.co.uk/mehdi-hasan/charlie-hebdo-free-speech_b_6462584.html

Alain Gresh, “Charlie Hebdo: A journey from anti-colonialism towards Islamophobia,” al-Araby, January 12, 2015.

<http://www.alaraby.co.uk/english/comment/18705071-5026-49d5-9bc7-e7c2ab282941>

Chloe Patton, “When blasphemy is bigotry: The need to recognise historical trauma when discussing Charlie Hebdo,” MONDOWEISS, January 12, 2015.

<http://mondoweiss.net/2015/01/recognise-historical-discussing>

Firoz Osman, “Freedom of speech is a French myth,” Middle East Monitor, January 12, 2015.

<https://www.middleeastmonitor.com/articles/europe/16295-freedom-of-speech-is-a-french-myth>

Noam Chomsky, “We Are All – Fill in the Blank,” Znet Articles, January 11, 2015.

<https://zcomm.org/znetarticle/we-are-all-fill-in-the-blank/>

Scott Long, “Why I am not Charlie,” MONDOWEISS, January 11, 2015.

<http://mondoweiss.net/2015/01/why-i-am-not-charlie>

Corey Oakley, “Charlie Hebdo and the hypocrisy of pencils,” REDFLAG, January 11, 2015.

<http://redflag.org.au/node/4373>

Tariq Ali, “Maximum Horror,” Counterpunch , January 9-11, 2015.

<http://www.counterpunch.org/2015/01/09/maximum-horror/>

Green Greenwald, “In Solidarity with a Free Press: Some More Blasphemous Cartoons,” The Intercept, January 10, 2015.

<https://firstlook.org/theintercept/2015/01/09/solidarity-charlie-hebdo-cartoons/>

Joe Sacco, “On Satire – a response to the Charlie Hebdo attacks,” the guardian.com, January 9, 2015.

http://www.theguardian.com/world/ng-interactive/2015/jan/09/joe-sacco-on-satire-a-response-to-the-attacks?CMP=share_btn_tw

David North, “‘Free Speech’ hypocrisy in the aftermath of the attack on Charlie Hebdo, World Socialist Web Site, January 9, 2015.

<http://www.wsws.org/en/articles/2015/01/09/pers-j09.html>

Teju Cole, “Unmournable Bodies,” The New Yorker, January 9, 2015.

<http://www.newyorker.com/culture/cultural-comment/unmournable-bodies>

Tim Wise, “Not Just a Joke: Reflections on Free Speech, Violence and Mislabeled Heroism,” TimWise.org, January 8, 2015.

<http://www.timwise.org/2015/01/not-just-a-joke-reflections-on-free-speech-violence-and-mislabeled-heroism/>

Zak Trophy, “Alain Gresh speaks out: What now for France?” al-Araby, January 7, 2015.

<http://www.alaraby.co.uk/english/news/1197a461-5553-44b3-9b7c-b9dbc376cbb9>

Jim Naureckas, “Remembering Victims of Terror—and Forgetting Some Others,” FAIR, January 7, 2015.

<http://fair.org/blog/2015/01/07/remembering-victims-of-terror-and-forgetting-some-others/>

怨霊ナショナリズム論（番外）演劇「イスラエル訪問」とパニック

首相によるイスラエル訪問は外交という名の演劇である。主演はごぞんじ安倍晋三、助演は悪役を演じさせたら並ぶものなきベンジャミン・ネタニヤフです。

安倍の役はもちろん日本国首相であり、舞台設定および脚本・演出は日本・イスラエル両国の外務官僚にちがいない。

観客はだれか。これは安倍とネタニヤフのファンだけ、というわけにはいかない。わたしたちも、そして世界も、つきあわされる。なんと知らない間にわたしたちはスポンサーにされているぞ。

役者として安倍は自分が何をさせられているのかを、おそらく、まったく理解できていない。こういうとき、演出家は苦勞するのか、それとも楽なのか。

▽ 演劇の意図

舞台藝術の研究者なら、この芝居をどう評価するか。主題は皮肉か偽善か不条理か。純照さんにくわしく解説してもらいたい。

脚本・演出の外務官僚には、さまざまな意図がありそうだけど、もしそのなかに、イスラエルと日本に対する皮肉があるとしたら、なかなか高級じゃないか。

この舞台の山場はホロコースト記念館ヤド・バシエムにおける日本国首相の長台詞だが、両国外務官僚が数ヶ月かけてすりあわせたはずの文言は優等生の作文とい

う感じがする。優等生といっても中学三年くらいですけどね。

このように、わたしたちはいま、ことばが意味を喪失した時代、詩もことばも失われゆく世界に生きている。

▽ 偽善スペクタクル

2015年、世界の政治演劇界は、現実の悲劇にもとづき、パリ市街を舞台とし、為政者数十人が立ち並ぶ世紀の偽善劇、大スペクタクルによって幕を開けた。安倍のイスラエル訪問は第二幕として小手がきいている。わるくない。

朝日新聞の政治部には演劇批評家としてきちんと仕事をしてもらいたいが、あいかわらず、役者の動作と台詞をなぞっているだけだ。

<http://www.asahi.com/articles/ASH1M5JHSH1MUTFK00L.html>

これなら特派員批評家は必要ない。通信社にまかせていけばいいじゃないか。

▽ パニック

わたしは役者はもとより演出家さえも何も深くはかんがえていないとおもう。

深くかんがえるためには、いま世界でなにが起きているかを、世界がどこへ向かっているかをよく知っていなければならないでしょう。でも、だれも知らない。だれもわかっていない。

1月11日、フランス全土で370万人が大行進を行った。参加した市民のおもいはそれぞれちがったかもしれない。まず犠牲者の追悼であったし、反テロリズムや表現の自由という標語もかけられた。

フランス市民だけでなくヨーロッパ社会の団結を讃える記事や論説がいくつもあった。しかし、あの大行進はパニックではないかと、わたしはかんがえている。

群衆が無意識にパニックを起こしているとしたら、それは社会が壊れかけている証だ。ピーター・ドラッカーなら、きっとそう言う。

怨霊ナショナリズム論 (22) 浮き草のひと

社会科の問題です。これから英文を訳しますから、いつだれがどの社会を対象として書いたものか、あててみてください。

▽

For the individual without function and status, society is irrational, incalculable and shapeless. The “rootless” individual, the outcast—for absence of social function and status casts a man from the society of his fellows—sees no society.

役目と身分をなくした個人にとって、社会は不合理であり、捉えようがなく、ゆが

んでいる。「根のない」個人、追放者——なぜなら、社会における役目と身分を失った人は同胞たちの社会から追放される——には社会が見えない。

He sees only demonic forces, half sensible, half meaningless, half in light and half in darkness, but never predictable. They decide about his life and his livelihood without possibility of interference on his part, indeed without possibility of his understanding them.

かれには悪魔のような暴力しか見えない。道理にかなっているような、いないような、無意味なような、そうでないような、半分は光のなかにあらわれて、半分は闇に隠れているような、絶体に予想がつかない暴力である。その暴力によって、相談する機会もあたえられず、理解する暇さえないまま、かれの人生と暮らしが決められてゆく。

He is like a blindfolded man in a strange room, playing a game of which he does not know the rules; and the prize at stake is his own happiness, his own livelihood, and even his own life.

かれは見知らぬ部屋のなかで、目隠しをされたまま、ルールがわからないゲームをしている人のようだ。だが、そのゲームには、かれ自身の幸せと暮らしばかりでなく、いのちまで賭けられている。

That the individual should have social status and function is just as important for society as for him. Unless the purpose, aims, actions and motives of the individual member of integrated with the purpose, aims, actions and motives of society, society cannot understand or contain him.

個人は社会において役目と身分を持つべきであり、これは社会にとっても、個人にとってとおなじように、大切なことだ。社会において、個々のメンバーが持つ目的や計画・行為・動機が社会が持つ目的や計画・行為・動機と調和しないかぎり、社会において個人は理解されず、受け入れられることもない。

The asocial, uprooted, unintegrated individual appears not only as irrational but as a danger; he is a disintegrating, a threatening, a mysteriously shadowy force.

人づきあいができず、居場所を失い、まわりに溶け込めない個人は単におかしな人だとおもわれるだけでなく、危険人物だと見なされる。かれは崩壊を導き、脅かす、得体の知れない闇の暴力となる。

▽

上の一説を読んで「疎外」ということばをおもいおこし、実存主義、サルトル、と直感したひとはかしこい。真の筆者はサルトルとおなじ時代に生まれたヨーロッパ人だ。

そして、現在のフランス社会およびヨーロッパ社会に生きるイスラム教徒をおもい浮かべたひとはするどい。

わたしは本をひらいてこの一節にさしかかったとき、まるで現代日本社会のことではないかとおもい、怖くなった。まさきに思い起こしたのは、2008年に秋葉原で無差別殺人を行った25歳の派遣社員であり、いまネットでむしゃぶられている19歳の「爪楊枝男」であり、赤木智弘が2007年に書いた「社会論」だった。

「丸山眞男」をひっぱたきたい--31歳、フリーター。希望は、戦争。

<http://t-job.vis.ne.jp/base/maruyama.html>

筆者の名はピーター・ドラッカーです。1909年の生まれだから、サルトルよりは四つわかい。フランスの哲学者が活躍するのは、大戦後、40年代の後半からだが、ドラッカーは1933年、23か24歳のとき、ヒトラーがまさに政権を奪おうとするころ、ヨーロッパ社会とナチズムおよびファシズムを分析し、三つの結論を得ていた。

1. ヒトラーの反ユダヤ主義は、その内的論理によって、「最終解決」、すなわちユダヤ人の皆殺しへと突き進む。
2. 西ヨーロッパ諸国の強大な軍事力をもってしても、ドイツ軍の進撃は止められない。
3. スターリンはヒトラーと協約を結ぶことになる。

予想はすべての的中する。ドラッカーの分析の精密さと洞察の深さにはおどろかされるが、未来を予見できた第一の理由は、ドラッカーがユダヤ系ヨーロッパ人として、ヒトラーを軽視せず、真剣に見つめていたことにある。後に、ドラッカーはヒトラーをよく読めば、結論は避けられないと言っている。

どこかの国では、うちの総理は当用漢字もろくに読み書きできないと、ばかにしていますけど、大丈夫ですか。自称「保守」の過激右派が出版している本を読むと、すごいことが書いてありますよ。かれらが唱える「保守革命」の正体はファシスト革命です。

1933年の草稿をもとに、ドラッカーは最初の著書 *The End of the Economic Man* を書き上げ、イギリスでは1938年の終わりに、アメリカでは39年のはじめに出版している。出版の8ヶ月後に、ナチス・ドイツはポーランドに侵攻した。

いまドラッカーは経営学の祖のように言われている。しかし、65年におよぶ研究の主題は一貫して共同体と社会と政治組織体と人の幸福だった。

▽

先に訳した一節は1942年に出版された *The Future of Industrial Man* の序文にある。人は社会的・政治的な存在であり、機能する社会を必要とし、それは人が生物的存在として呼吸するために空気を必要とするのとおなじだという。

社会が機能しなくなったら、社会がこわれはじめたら、人はどうなるか。こわれた社会はどこへ向かうのか。

かくして、わたくしはドラッカーも読むことになった。わたしに何度も、ドラッ

カーを読めと、まるで脅迫するように勧めてくれた友人に感謝します。

さて、わかきドラッカーは大学では講義らしい講義はほとんど受けずに、図書館で本を濫読していました。おそらく数年間に数千冊は読んでいたでしょう。

その読書青年ドラッカーがもっともつよく影響を受けた本が二冊あり、そのひとつがエドモンド・バーク、1790年の著書 Reflections on the French Revolution でした。フランス革命の省察です。

この本は安倍首相のブレインと呼ばれる知識人らの愛読書なんです。エドモンド・バークは「保守主義の父」と呼ばれる。この巨人は日本の過激右派に多大な影響を及ぼしたと、わたしは見ています。

そして、エドモンド・バークこそ、われらが狼ゼエブ・シュテルンハールがファシスト思想の源流だと見なしている思想家です。

バークの思想は深い。バークの影響を受けたドラッカーはファシズムとナチズムは全体主義だと明確に規定し、その悪を人生を賭けて糾弾した。その一方で、バークはファシスト思想の源流であり、バークから学んだ過激右派は日本にファシスト革命を起こそうとしている。

バークのなにがドラッカーと過激右派にそうさせるのか。それが知りたい。

▽

ドラッカーの書籍は本屋の経済や経営の棚においてあります。立ち読みしてみてください。ウォール街のベストセラーとなった『マネジメント』をひらいて、いきなり「全体主義」と書いてあっても、おどろかないように。

それから他の著作をぱらぱらと読んで、正しく恐怖にふるえてください。ドラッカーの本に21世紀社会の希望を読み取れるかどうかは、あなた次第です。